

観光文化

Tourism & Culture

214

July 2012

特集◎小笠原観光

◆巻頭言

魅力ある観光資源としての小笠原に接する作法 野口 健……①

◆特集

・小笠原諸島の自然と小笠原村の将来

— 自然環境保全と村の元気につながる観光とのバランス 森下 一男……②

・世界自然遺産小笠原諸島の自然、文化と観光

— 順応的な自然の保全とルールを楽しむ観光の在り方 可知 直毅……⑦

・小笠原諸島における文化ツーリズムの可能性

— 観光資源としての言語景観 ダニエル・ロング……⑫

・島人のこころ

島で暮らすということ 筒井 秀法……⑰

大自然の恵みと心の栄養 筒井 映子……⑳

・母島を愛するということ

母島に暮らす住民として、ガイドとして 梅野 ひろみ……㉒

母島育ちの目に映る自然の輝きと人の優しさ 梅野 なぎさ……㉔

・日本の亜熱帯・小笠原が惹きつける魅力

— 小笠原諸島の自然・文化を守る勇気と観光をロード・ハウに学ぶ 飯田 辰彦……㉗

◆連載

I あの町この町 第50回

環境資源 — 鳥取県智頭町 池内 紀……㉚

II ホスピタリティーの手触り 71

旅するベジタリアン 山口 由美……㉝

◆新着図書紹介……㉞



湧水・木曾路福島宿

山峡の街道、木曾路は中山道の中でも江戸時代を彷彿させるに十分な宿場が多く、昔日の面影を色濃く今に伝える。約九十キロメートルに及ぶ街道に十一宿を数えるが、今回お伝えする福島宿は、その中間点に位置する。江戸時代、東海道の箱根、新居、中山道の碓氷と福島の間所は四大間所と呼ばれていた。それだけに交通の要衝でもあり、「入り鉄砲と出女」を厳しく監視していたと伝えられる。また、木曾ヒノキの管理を尾張藩に託して、密輸が行われないよう目を光らせていた。

そんな福島間所だけに、名所・旧跡が多いのである。町並みを歩くと当時に思いをはせ、すがすがしい気分となる。写真の湧水は高台に位置する上ノ段にあり、千本格子の民家や高札場が目映り、江戸時代の風情が心地よい。

勢いよく桶から流れ落ちる湧水を「水場」と呼んでいた。江戸時代から昭和の初めごろまで、町内の簡易水道として住民に利用されていた。昔の上水道を知る貴重な遺産と言える。

(写真・文 樋口健二)

二〇〇三年から毎年のように小笠原諸島に通っています。昨年、世界遺産に選ばれ「うれしい」と思う反面、「大丈夫かな？」という思いもありました。歴史上、一度も陸続きになつたことのない海洋島であるこの小笠原諸島には固有の動植物等が非常に多く生存しています。しかし、他からの侵入がほとんどなかったため、外来種や環境の変化には、めっぽう弱いガラスの生態系を持つた島なのです。

日本人は「世界遺産」というブランドが好きですが、世界遺産に登録され環境の保護が徹底されて良い事ばかりかという決してそうではありません。屋久島が世界遺産になったとき、屋久島には受け入れ態勢がほとんどありませんでした。たくさんの人が、ガイドもつけずに好き勝手に歩き、美しい苔を枯らしてしまいました。世界遺産になつたことが、屋久島にとっては不幸な結果になつた面もありました。白神山地では、地元のマタギが森を守ってきましたが、世界遺産になつた途端に「熊を殺すマタギは環境破壊だ、残酷だ」と非難されたり、国指定鳥獣保護区に指定されたりしたことでマタギ文化は姿を消そうとしています。

海外に目を向けてみると、アメリカのワシントン州にあるマウントレーニア国立公園は入山許可制で、許可を得ていない者は一切、入山することができません。公園内ではレンジャーの指導が行き届き、トイレの無い場所では、し尿を袋に入れて持ち帰ることはもちろんのこと、ごみも一切落ちていません。

魅力ある観光資源としての小笠原に接する作法

アルピニスト 野口 健

私は東京都レンジャーの名誉隊長として、小笠原のエコツーリズムの在り方についていろいろと関わらせていただきました。当時、無人島の南島は人が入りすぎて危機的な状況でした。罰則規定はありませんが、小笠原村と東京都との取り決めて上陸する観光客を一日百人までとし、お客さん十人に一人はガイドをつけるなど、徹底的な管理をすることで、現在は非常にきれいな状態が保たれています。

自然を守るにはお金がかかります。どのような徴収方法が良いかは十分な議論が必要ですが、小笠原諸島でも何らかの形での入島料のような微徴も必要なのではないでしょうか。入島料が入れば、保護管理の財源に充てられるし、長いスパンで考えれば植林、遊歩道の整備、植生の調査などなど、本格的、専門的に取り組んでいくこともできます。自然環境を守っていくには地元の理解も必要ですし、人もお金も必要になってきます。人々の環境への意識向上とともに、今では、自己負担を払う人はさほど多くはないと思われれます。

小笠原諸島への上陸は、何のための世界遺産かを個々で考える良いチャンスになるのではないのでしょうか。島の自然に接し、島の自然がよいと思うからこそ、それを守りたいという心が芽生えてくるのだと思います。環境問題は人間社会の問題。だからこそ、これから島に行かれる方々には、島のルールをよく理解したうえで入島していただきたいと思えます。

(のぐち けん)

小笠原観光

しま人が笑顔で暮らす島。訪れる人を心のそこから魅了する島。その魅力の源泉とは？

小笠原らしさを継承していくための、保全と利用のバランスにも注目が集まっています。

小笠原は観光文化の本質に多くの示唆を与えているような気がします。

今号は、小笠原を愛してやまない小笠原島民と小笠原ファンを代表して、九名の方が

小笠原への思いを語り、小笠原にふさわしい観光を展望してくださいました。

小笠原諸島の自然と小笠原村の将来

—— 自然環境保全と村の元気につながる観光とのバランス

東京都小笠原村長

森下 一男

特集 1

観光地としての小笠原

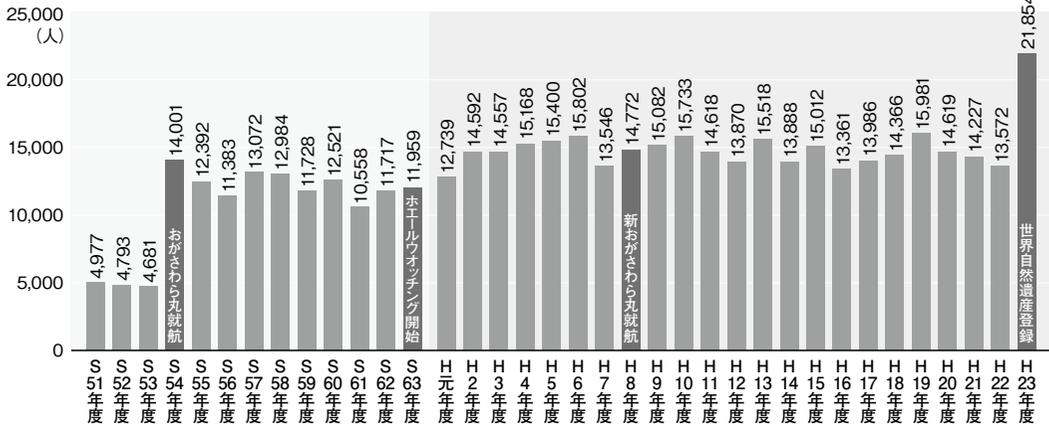
小笠原諸島は東京の南方一〇〇〇キロに浮かぶ島々で、アクセスは船便しかなく、東京竹芝から父島へは定期船おがさわら丸で二十五時間半、また五〇キロ南にある母島へはさらに約二時間の船旅が必要です。亜熱帯気候に属しており、本土とは趣の異なる自然豊かな観光地で、ここでしか見られない固有の動植物や独自の生態系を見ることができま

す。周囲に広がる大海原と緑豊かな島々から成る大自然を舞台に、クジラ・イルカウォッチングやシーカヤック、ジャングルトレッキングなどのアクティビティも盛んで、平成二十三年度は定期船で二万二千人ほどの観光客が訪れています。

小笠原諸島に人の定住が始まったのは一九世紀以降で、その歴史はわずか二百年にも満たません。戦前までは南国ならではの気候を生かした農業が盛んで産業の中心でした。太

平洋戦争を経て小笠原諸島は米国の統治下に置かれ、昭和四十三年に日本に返還されました。以後本格的な復興が始まり、基本的なインフラが整備され、本土との交通手段である定期船も代を継ぐことに改良されてきて、村民生活の安定に歩調を合わせ観光地としての小笠原諸島が認知されるようになってきました。昭和五十四年に先代のおがさわら丸になり、所要時間が三十九時間から二十八時間変わった時と、ホエールウォッチング

図1 年度別観光客（父島）



ホールウオッチング

が始まった昭和六十三年以降に観光客の伸びがあります。以後昨年の世界自然遺産登録までの観光客数は横ばい状態でした。潜在的には来訪意向のある方は多いと思われましたが、船の所要時間が長いだけでなく、一艘の船が竹芝と父島間を往復し、最低六日間を要するため、実際にはなかなか小笠原への旅行につながらなかったのだろうと考えられています。

ただそのような制約があったことが、米国

からの返還以降の急激な観光開発を抑制し、結果として徐々に観光振興を図れてきた要因の一つであったと考えています。

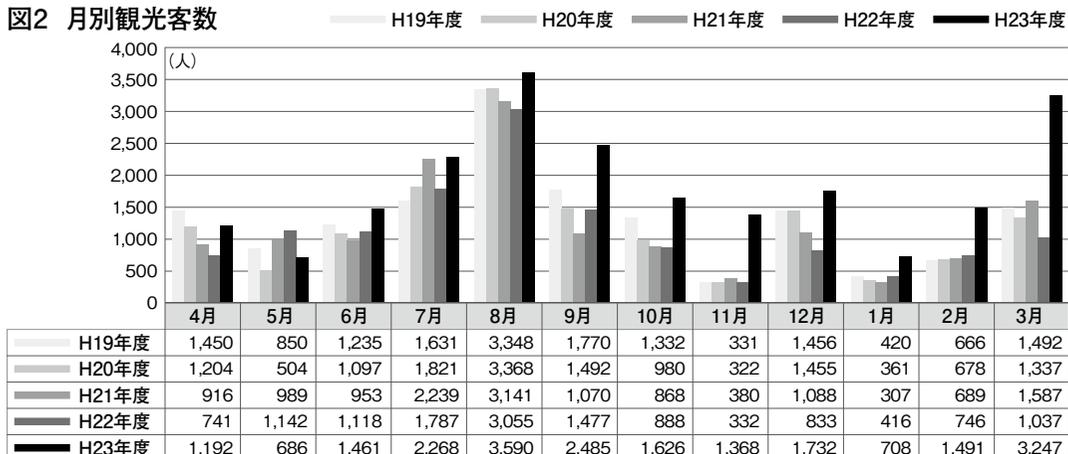
「世界自然遺産登録」を契機とした変化

しかし平成二十三年六月、ユネスコの「世界自然遺産」に登録されて以降は、小笠原の観光を取り巻く環境は大きな変化を見せています。

まず、遺産登録決定の前後から各種マスコミにおける「小笠原」の露出が大幅に増え始めました。本来、観光地としてお客さまを呼び込むためには多大な予算をかけて「宣伝」を行わなければなりません。昨年春ころから多くの媒体で「小笠原」が取り上げられ始め、こちらから求めずとも各方面に「宣伝」をしていたことになりました。「小笠原」がまだまだ認知されていないと感じていただけに日本中に知られる機会となり、来島者が増やす大きなきっかけになったと考えています。

また、遺産登録決定以降の観光客数を平成二十二年と平成二十三年で比較すると約六〇%増になりました（定期船来島者ベース）。さらに例年四〜六艘程度の不定期のクルーズ客船が、今年度は二十四艘予定されて

図2 月別観光客数



この増加した分の客層は高齢者層で、また小笠原の観光事情に関する情報をあまり持たずに来る方が多くなったというのを耳にします。実際に「世界遺産だから来た」ということを私自身も聞きました。このような方々は実際に小笠原へ行くとした時、船や宿、各オプションがまとめて手配されている旅行会社のツアーを利用されています。

またその結果、二十五時間半の船旅や島に來てからの山歩き、ボートツアーもどんな内容かあまり把握できていないまま行程に組み込まれているため、後はお任せということなどで、実際に参加してから体力的なことなどのミスマッチを起している場合があるようです。

そのことは受け入れる事業者側にも当初戸惑いがありました。一年を経過し次第にどのようなことを注意していけばよいかを知り、また観光客への配慮などにも徐々に慣れてきているようです。

いずれにしても大切なお客さまですから、事業者にはもてなしの心を維持してもらうよう心掛けていただくとともに、定期船の定員減による居住性の向上などのサービスに象徴されるように、観光客数を増やすということではなく、これまでの閑散期を中心に増

えたお客さまの数を高止まりさせる努力が必要であろうと考えています。

村では、世界遺産登録前からの取り組みとして、ツアーデスク事業を立ち上げ、小笠原の規模に適したツアー造成を全国の旅行会社に働きかけてきました。平成二十三年度には一定の成果の下、ツアー造成は民間に委ね、新たな試みとして小笠原村観光局を立ち上げました。この観光局は都心に拠点を置くことで、その機動力をフルに發揮し旅行会社への説明やマスコミ対応、イベント参加又は実施などを行っています。



小笠原村観光局 (東京都内)

今後も小笠原だけでなく日本の観光事情に即した対応を進めたいと考えています。

エコツーリズムを 中心に据えた観光振興

遺産登録を受けての影響としてもう一つ、観光客数の増加による自然環境へのインパクトが注視されています。遺産登録決定にあたり、世界遺産委員会からは「注意深い観光管理を実施すること」や「観光業者に対して注意深い規制と奨励措置を行うこと」などが奨励事項として指摘されました。

しかしながら、小笠原諸島では行政による各種法令・制度の他、ホエールウォッチングルールを代表とする各種自主ルールが世界遺産候補地になる前から機能してきており、「自然環境を保全しながら観光利用し、地域の振興を図る」エコツーリズムを先駆けて実践してきました。遺産登録後の観光客増に対してもそれらは有効に機能し続けており、今のところ観光客が増えたことによる大きな課題は発生していません。ただ、小笠原を世界遺産として維持していくための取り組みとしては候補地になった時からの課題である外来種対策が大きなウエートを占めており、このことはこれからも関係機関が連携して取り組んで

いかなければなりません。そして小笠原以外から入ってくる観光客による新たな外来種の持ち込みや、島間での移動がないよう到来者として村民全員が外来種対策の重要性を認識し、各種対策に協力していくことが必要です。ただ、あまり難しいことはかりを押し付けず、靴底洗いや衣服についた種子の除去を楽しんでもらえるような仕組みが浸透しているところでは。

また、私が会長を務めている小笠原エコツーリズム協議会では、小笠原におけるエコツーリズムの更なる推進のため「小笠原陸域ガ

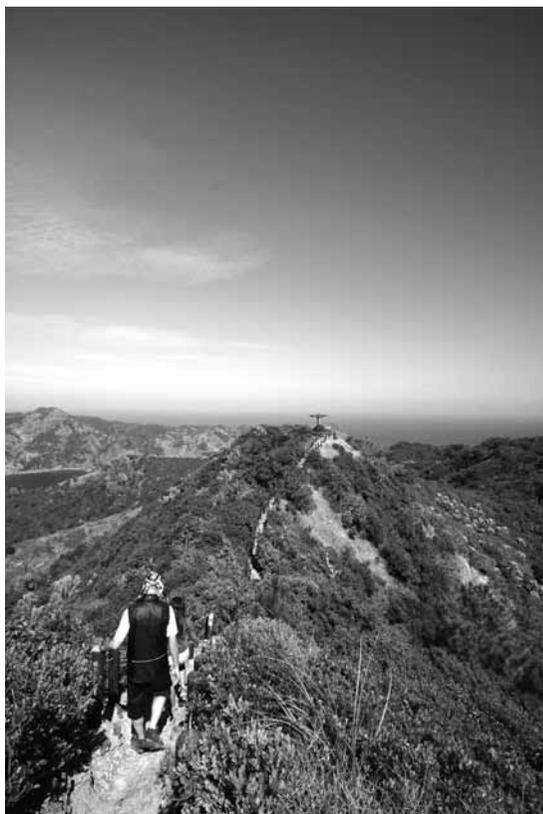


はじめ丸乗船前の泥落としマット

イド制度」の運用を平成二十三年度から始めました。これは「陸域ガイド講習の受講」「保険制度への加入」「各種ルールの遵守同意」「救命救急技術の習得」など、所定の基準を満たす者を「小笠原陸域ガイド」として登録する制度です。小笠原の自然や文化を保全し、持続的な利用を図り、利用者や地域社会に信頼されるガイドとして、ガイドの社会的な地位を確立することを目的としています。登録ガイドは、世界遺産の中心的価値が陸域にあることから、遺産価値を利用しながら維持していくためのけん引役としてこれからも活躍が期待されています。

さらに、今後の小笠原におけるエコツーリズムのあるべき姿や取り組みを整理するため、エコツーリズム推進法に基づいた「エコツーリズム全体構想」の策定に取り組んでいくところです。

小笠原村では平成五年の総合計画から村づくりの視点に「自然との共生」を掲げ、エコツーリズムを基軸とした観光振興を図ってきました。私の先輩たちの世代からこのような視点を持って一歩一歩積み上げてきた結果が、今日の世界遺産登録と自然環境とのバランスのとれた観光振興につながっていると考えています。



陸域エコツアー

今後の課題

遺産登録元年は多くのお客さまにご来島いただくことができました。マスコミの取材もニュースからバラエティーまでさまざまです。そして一年を迎えたところでニュース系の取材はこぞって「登録から一年経つての課題は？」という聞かれ方になっています。課題でなければニュースではないという雰囲気を感じます。

私たちとしては、船会社の将来を見据えた定員減という英断や、ガイド登録制度の開始、

これまで村民の理解の下で取り組んできたさまざまなルールによって守られた自然などをポジティブに取り上げてもらいたいと思いが、どうしても観光客増によるマイナスイメージを引き出そうとしています。前項では「大きな課題はない」と書きましたが、課題がないといえばうそになるかもしれません。しかし、プラス面を見ながら解決策を考えると、さまざまな規制を厳しくするよりも、事業者や村民のちよつとした自然への配慮や他の人への思いやりで片が付くのがこの小笠原の規模のように思います。

小笠原カントリーコード 〜自然と共生するための10カ条〜

- ① 貴重な小笠原を後世に引き継ぐ
- ② ゴミは絶対に捨てずに、全て持ち帰る
- ③ 歩道ははずれで歩かない
- ④ 動植物は採らない、持ち込まない、持ち帰らない
- ⑤ 動植物に気配りをしながらウォッチングを楽しむ
- ⑥ サンゴ礁等の特殊地形を壊さない
- ⑦ 来島記念などの落書きをしない
- ⑧ 全島キャンプ禁止となっているので、キャンプはしない
- ⑨ 移動はできるだけ自分のエネルギーを使う
- ⑩ 水を大切にし、トイレなど公共施設はきれいに使う

年間何十万、何百万人の観光客を迎えている他の世界遺産地域とはケタが違います。二万五千人が二万人を超えたレベルです。ゴミも気がついたら拾えばいいだけです。一カ所に集中することなくみんなが分散しながら利用すれば、自然へのインパクトも軽減するはずですよ。

村民も来島者も自然に優しくなることで小笠原の課題は解決し、その結果自然環境が保全され、村は元気を維持し、観光とのバランスがとられるものと考えています。

(もりした かずお)

世界自然遺産小笠原諸島の自然、文化と観光

— 順応的な自然の保全とルールを楽しむ観光の在り方

首都大学東京大学院

理工学研究科 教授

小笠原研究委員長

可知 直毅

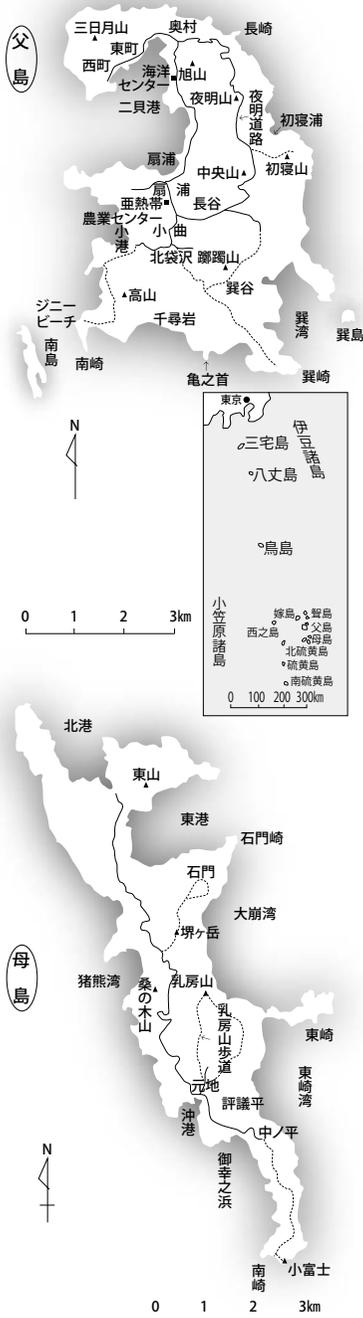
可知教授には、東京都立大学（現首都大学東京）時代から四十年以上にわたる小笠原の自然の研究を基礎とした最近の外来種対策などの保全の取り組みについて生態学的な視点から、ロング教授には小笠原の文化の研究と文化エコツーリズムについて人文科学的な視点から、文系・理系を超えた学際的な研究をとおして見えてきた小笠原の魅力を描いていただきました。

二〇二二年は、世界遺産条約（世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約）が一九七二年に第十七回国連ユネスコ総会で採択されてから四十年目、一九九二年にわが国がこの条約を批准して二十年目の節目の年である。二〇二一年六月二十九日、パリで開催

された第三十五回世界遺産委員会で、小笠原諸島は日本で四番目（注）となる世界自然遺産地として登録された。これは小笠原の自然の価値が世界に認められたと同時に、そのかけがえのない自然を保全し次の世代に伝えていく義務を国際的にも負ったことを意味す

る。観光利用においても適切なルールが必要である。本稿では、生態学的な観点から、小笠原の自然の価値を損なう最大のリスク要因である外来生物に対する対策を紹介しながら、小笠原における観光の在り方について考えたい。

小笠原諸島



小笠原諸島の概要

小笠原諸島は、東京から約一〇〇〇キロ南に位置する三十ほどの島々である。小笠原諸島には、父島列島、母島列島、聳島列島から成る小笠原群島、火山（硫黄）列島、西之島、沖ノ島島、南島島が含まれる。小笠原群島が島として形成されたのは、少なくとも百万年より前といわれている。一方、火山列島が生まれたのはわずか数万年前と推定されて

いる。小笠原諸島最大の父島でもその面積は二四km²であり、全ての島の総面積も七〇km²にすぎない。気候は亜熱帯性で、父島の年平均気温、降水量はそれぞれ約三三℃と二三〇〇mmで、亜熱帯の海洋島としては雨量が少ないのが特徴である。

海洋島の生態系

成立以来、大陸と陸続きになったことがない島を海洋島という。小笠原諸島は、日本の



写真1 小笠原の固有植物オオハマギキョウ（父島列島・東島）

代表的な海洋島である。ここでは、大陸から隔離された島という生態系のなかで固有種を含む独自の生物間相互作用のネットワークが見られる。また、小笠原は大陸が形成される初期過程を陸上で観察できる世界で唯一の場所である。小笠原諸島の生物相（注2）は、構成種数が少なく特定の分類群（例えば肉食の哺乳類やカエルなどの両生類）を欠くという特徴を持つ（この特徴は、小笠原に限らず海洋島で一般的に見られる）。また、オガサワラオオコウモリ、アカガシラカラスバト、オガサワラシジミ、ムニンノボタン、オオハマギキョウ（写真1）など、隔離された生態系で独自の進化を遂げた固有種が多く存在する。植物の四〇％（うち樹木種に限ると七〇％）、陸鳥の八〇％、陸産貝類の九〇％が固有種である。

歴史

一八三二年、小笠原諸島に最初に定住したのは欧米およびポリネシアなどの人々三十名であった。その後、一八六二年に小笠原諸島が日本の領土として国際的に認められると、日本人による開拓が始まった。開拓初期には、羽毛採取のためアホウドリが乱獲され小笠原諸島から絶滅した。また、サトウキビ

栽培などで開墾可能な平地や斜面の多くが畑地に変えられた。捕鯨やサング漁など水産業も急速に発展し、昭和初期の小笠原は内地の不況と対照的に好景気が続いた。しかし、太平洋戦争勃発後、小笠原は要塞化が進み、一九四四年には島民六千八百八十六人が内地に強制疎開させられた。戦後は米軍の管轄下に置かれ、帰島を許されたのは一部の欧米系島民だけであった。この状態は一九六八年に小笠原が日本に返還されるまで続いた。二〇二二年六月一日現在の住民基本台帳登録者数は、父島が二千八十五人、母島が四百八十七人である。その他の島は、硫黄島、南鳥島を除いて全て無人島である。

世界遺産登録ビフォー・アフター

世界自然遺産地の条件は「自然景観」「地形・地質」「生態系」「生物多様性」の四つのクライテリア（評価基準）のうち一つ以上に合致することである。二〇一〇年、日本政府は「小笠原諸島の自然は、地形・地質（地球の歴史を代表する）、生態系（生物進化の具体的な見本）、生物多様性（希少動植物の主要な生息地）」の三つのクライテリアに合致するという推薦書を世界遺産委員会に提出した。

観光資源としての自然の価値

結果的に二〇一一年の世界遺産委員会で認められたクライテリアは、推薦した三つのクライテリアのうち「生態系（生物進化の具体的な見本）」のみであった。しかし、大陸が生まれる初期段階が間近に観察できるといいう地質学的な価値や多くの希少動植物の主要な生息地としての生物多様性の価値は、進化の見本としての価値とともに小笠原の自然の価値を代表する三本柱であることに変わりはない。

むしろ、自然の価値を観光資源として捉える場合は、特定の地域や特定の生物種にだけ注目するのではなく、生物、生態系、地形、地質など自然そのものの多様性を知り、楽しむという視点が重要である。

固有種と外来種の宝庫

海洋島の生態系は外来生物の侵入に対して脆弱である。小笠原諸島でも、多くの外来生物が小笠原に侵入しており、在来の生態系保全にとって現在も大きな脅威となっている。世界自然遺産登録に向けての最大の課題がこの外来種問題であった。そこで、国（環境省、林野庁）、東京都（環境局）、小笠原村の各行政機関や地元NPO、地元住民、研究者や専門家などが互いに協働することにより、外来種の駆除と抑制のためのさまざまな事業が大規模に実施された（写真2）。対象となった外来種は、固有植物を含む在来植物を食害するノヤギやクマネズミ（写真3）、鳥を襲うノネコ、オガサワラシジミ、オガサワラゼミなど多くの固有昆虫の天敵であるグリーンアノールトカゲ、固有陸産貝類（カタツムリ）の天敵である肉食性のプランナリア（ユージニアヤリガタウズムシ）、湿性高木林に侵入して優占種となるアカギ、乾性低木林



写真2 保護区を囲むノヤギノネコ抑止柵（父島・東平）

写真3 外来種のクマズミにより食害を受けた固有種
タコノキの果実



に侵入して在来植物を抑制するモクマオウやギンネムなど実に多様である。小笠原諸島は固有種の宝庫であると同時に外来種の宝庫ともいわれるゆえんである。

複雑なネットワークの順応的管理

実際に外来種駆除事業を実施して再度認識された課題が、種間相互作用への配慮である。種間相互作用とは、生態系のなかで生活する生物同士の関係のことで、植物の葉が

昆虫に食べられたり、その昆虫が鳥に食べられたりといった「食う・食われる」の関係や昆虫や鳥によって植物の花粉や種子が運ばれたりという共生関係など、生物間のネットワークに見られる関係のことである。このネットワークに外来種が加わると、新たな種間相互作用が生じる。外来種の種数が増えればそれだけネットワークも複雑になる。例えば、ノヤギを駆除することにより、食害に遭っていた稀少植物は守られるかもしれないが、同時にノヤギに食われて抑えられていたギンネムが繁茂してしまいかもしれない。そこで、「種間相互作用を考慮して駆除の方法や順番を決定し、駆除した結果をモニタリングして、予想通りでない場合には、新たなシナリオを設定して中止も含めて駆除方法を変更する」という順応的管理の仕組みが導入されている。こうした取り組みは、直接的には小笠原の自然の価値をできるだけ損なわないことが目的であるが、同時に世界遺産登録のための必要条件でもあった。

リスクヘッジをベースにした観光

小笠原諸島の世界自然遺産登録に際して世界遺産委員会から日本政府に対して二つの要請事項と三つの奨励事項が示された。

◎要請事項

(1) 外来種対策の継続

(2) 観光や島へのアクセスの適切な管理

◎奨励事項

(1) 海域公園地区の拡大

(2) 地球温暖化による自然環境に対する

影響のモニタリング

(3) 将来的な来島者増加への対応

要請事項の(2)と奨励事項の(3)は観光が直接かわる課題である。アクセスの管理とは、具体的には外来種の持ち込みや分布を拡大しないような管理のことで、観光に伴うリスクもその一つである。

ルールを楽しむ観光

現在、小笠原の父島では、エコツアーで利用されている地域の入り口には、陸産貝類の天敵のブラナリアや外来植物の種子が靴底や衣服について拡散しないように、靴底の泥を落とすのこやブラシや粘着シートがついたローラーが設置されている(写真4)。自然を楽しむための地域に入る前に、靴の底の泥や衣服についてきた種子を落とすことは、特別な配慮を必要とする地域に入る前に「身を清める」ことを自覚することにもなり、エコツアーに参加する観光客にも好評だそうだ。また、

定期船おがさわら丸の出港地である竹芝棧橋でも、乗船前に靴の底の泥を落とす試みも実施された(写真5)。これらは、もともと外来種対策として設置されたものであるが、観光客にとっては非日常の体験として観光の満足度を高めることにつながるのではないかと見られる。自然ガイドによる解説付きのエコツアーは、一般の観光客が小笠原の自然



写真4 外来種拡散を防ぐための「清めの場」(父島・東平)

を楽しむための仕掛けとして重要である。小笠原諸島で保全上重要な地域の多くは国有林であるが、林野庁はこれらのうち自然度の高い地域を森林生態系保護地域(注3)に指定している。一般の観光客がこの地域に入るためには、認定を受けたガイドによるエコツアーに参加することが求められている(写真6)。これも、小笠原の自然を適正に利用することが本来の目的であるが、同時に観光客が小笠原の自然の価値を知り、単独では経験



写真5 おがさわら丸乗船口での靴底の泥落とし(東京・竹芝棧橋)

写真6 ガイドの同行が必要な森林生態系保護地域内の歩道(父島・東平)



できない体験の機会を与えている。観光客にとっても、ルールを守ることが結果的に自身の満足度を高めることにつながるであろう。

(かち なおき)

- (注1)日本の世界自然遺産地…
- 一 屋久島 一九九三年十二月
 - 二 白神山 一九九三年七月
 - 三 知床 二〇〇五年七月
 - 四 小笠原諸島 二〇一二年六月
- (注2)小笠原諸島の生物相(特定の地域に生息・生育する生物の種類組成)は、環境省小笠原自然情報センターのホームページで公開されている。
http://ogasawara-info.jp/specialist/sizen_data.html
- (注3)森林生態系保護地域…原生的な天然林を保存することにより、森林生態系からなる自然環境の維持・動植物の保護、遺伝資源の保存、森林施業管理技術の発展、学術研究等に資する。(林野庁ホームページより)

小笠原諸島における文化ツーリズムの可能性

— 観光資源としての言語景観

首都大学東京大学院 人文科学研究科 教授
NPO法人小笠原自然文化研究所理事

ダニエル・ロング

ことばは観光資源として考えられる。観光資源は、人間が作った「文化的観光資源」と人間が作っていない「自然観光資源」に分けることができる。パリのエッフェル塔や東京のスカイツリー、姫路城やピカソが描いた絵画『ゲルニカ』を目的とした観光は文化ツーリズムといえる。米国ノースダコタ州のマウント・ラシユモアや金沢の兼六園は見方によっては自然とも文化とも分類できよう。文化には有形と無形の両方のあるから文化的観光資源にもその両方がある。ブロードウェイの芝居鑑賞を目的にニューヨークを、あるいは御柱祭^{おんばしら}を観るために諏訪を訪れる場合、それは文化的観光資源を活用した観光といえる。

見えない観光資源、ことば

言語も地域の「観光資源」として考えることができる。確かに「大文字焼きが見たいか



写真1 ギンギン（漁業関係者が履くサンダル）

ら京都に行こう」と同じ気分で『オオキニ』や『オイデヤス』と言われたいから京都に行こう」と言う人はいない。しかし、「あの時に耳にした穏やかな響きを持った京ことばが良かった」という記憶や感想を、京都へ旅した時の全体の旅行経験の一要素として挙げることはできる。日本各地で使われている標準語の「いらっしやいませ」に当たる奄美大島の「いもーれ」、南大東島や八丈島の「おじゃりやれ」、伊賀上野の「また来てだーこ」なども観光資源として活用されていることばである。

小笠原ことばの独自性

小笠原諸島の場合には「小笠原ことば」と呼べる言語変種がある。この用語は島で現在あるいはかつて使われていた標準語と異なる言い方を全て含む総称としてここで使っている。小笠原ことばといわれているほとんどの

単語はハワイ語や英語、八丈語（八丈島方言）などよその言語体系に由来する。そういう意味では小笠原固有のことは少ない。日本語の省略によるギョサン（漁業関係者が履くサンダル）や語源不明のウンボシ（タカラガイ）などはこれに当たる（写真1）。しかし、小笠原の自然の独自性は固有種だけではなく、よその地域にも生息している生物の独特な組み合わせ（生態系）にあるといえるように、小笠原ことばの独自性はその組み合わせにある。すなわち、英語とハワイ語、八丈語のそれぞれの単語が同一の地域で日常的に使われているのは、地球上で小笠原諸島だけである。

言語景観から見える島の生活文化

小笠原ことばが観光資源として使われている例は島を訪れたら見かける。集落を散歩しても、山に入っても、海岸で遊んでも、小笠原ことばが看板などの表示で使われる「言語景観」が目につく。

言語景観とは、

- (1) 公な場で
- (2) 受動的に視野に入る
- (3) 不特定多数に向けた
- (4) 文字言語

と定義つけられる。小笠原では木の和名、

写真2 ローズード
(ムニンヒメツバキ)



写真3 ルーベル
(ヒメフトモモ)

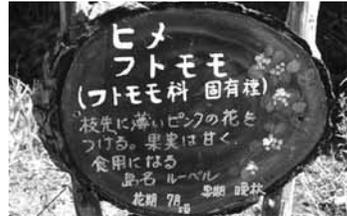


写真4 生態系の解説板に使われる小笠原ことば

科、学名といった情報が書かれている解説札には島名が表示されていることも多い。写真2は大神山公園にあるローズード（ムニンヒメツバキ）で、写真3は宮之浜道にあったルーベル（ヒメフトモモ）の解説札である。これらの謎に満ちた島名を見たことで島の文化に興味を持って調べた観光客は、ローズードは英語の rose wood（バラの木）、ルーベルは英語の blueberry のそれぞれが訛ったこと（由来）することが分かる。山や海岸では、一本の木の説明ではなく、その生態系全体を解説している立て看板がある（写真4）。シュロ（オガサワラビロウ）の表示をきっかけにガイドは島の生活文化（木の利用方法など）について説明することがある。例えば、昔から島の屋根を葺くのに使われたこの木の葉をシロツパと呼んでいたのは、葉が枯れると白く見えるからだともいわれているがこれは民間語源説であり、実は「棕櫚」と書かれるシュロの木の名前がシロとなったのは、関東方言によく見られる「拗音の直音化」という音声変化現象である。同様に、「ヒデノキ（シママロ）」という島名は火が付きやすい特徴に由来し、昔はコックジョ（土間の台所）の釜の焚きつけに使われた「うんぬん」という生活習慣の話をするきっかけにもなる。

島民がつくる言語景観

もちろん小笠原ことばが書きことばとして現れるのは公園の公共表示だけではなく、レストランや食堂といった民間人がつくった言語景観もある。チギ(バラハタ)やアカバ(アカハタ)といった魚がメニューに載る時は、標準和名よりも島名で表示される傾向にある(写真5)。

料理名には、ピーマカやダンプレん、島ドーナツがあるが、外食の店ではあまり見かけない。それは別名が使われるというよりは、これらの料理そのものはあまり外食店のメニューに出されていないのが原因だ。私のような島外の人間はこういう島独特のものを食べたがるが、島の人に聞くとこれらは素朴な家庭料理というイメージがあり、はるばる「ナイチ」(本土)から来られたお客に出すわけにいかないと言う。言語学用語を使えば、ピーマカやダンプレんは「語形」そのものが独特だが、ドーナツという語形そのものは内地にもあるもので、独特なのはむしろ「語義」である。つまり、内地の想像する浮輪形のお菓子と違って、島ドーナツはテニスボールの大きさの球で、ケーキの油揚げである。形も味もよく似ている沖縄のサーターアングギーと直

写真5 メニューにあるチギ(バラハタ)

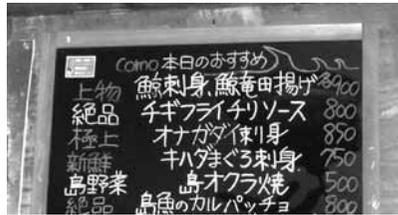


写真6 ピーマカ(酢漬けの魚)

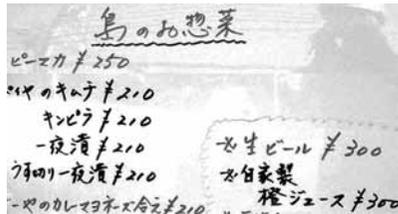


写真7 ダンプレん(西洋すいとん)

接結びついているかどうかは不明だが、小笠原のことば、料理、文化、音楽などにおいて沖縄の影響がほとんど皆無だということを考えると、むしろ偶然の一致の可能性が高いと思われる。いずれにしても、ダンプレんやピーマカ、島ドーナツという文字を見かけるのは島民を対象としたものが多い。写真6はスーパーで販売されているピーマカの、写真7は夏祭りで父島婦人会が売るダンプレんの、それぞれの看板である。

歴史の軌跡を表すことば

祭りと言えば、東京都立小笠原高校の学園祭「ビーデ祭」も小笠原ことばである(写真8)。「ビーデビーデ」(ムニンデイゴ)という言い方はハワイ語のヴィリヴィリが複雑な音変化を繰り返してきた単語である。

小笠原ことばが、店や施設の名称に使われることもある。近年の使用例を挙げると、長期滞在者の宿屋「タマナ荘」や「パンとケーキの店たまな」「カフェ・グリーンペペ」「せーれー館」が思い浮かぶ。小笠原諸島で父島に次ぐ二番目に大きい島である母島では、民宿の「こぶの木」や「アンナビーチ」の看板や送迎車が目につく。島なので、数多くの船を日常的に見かけるが、船体に書かれている

「ウェントル2」や「アイツバラII号」のような小笠原ことばも見かける。

これらの名前に小笠原ことばの複雑な歴史が凝縮されている気がする。入植してきたさまざまな民族が話していた言語がそれぞれ表れている。タマナ（テリハボク）は一八三〇年代から住み始めたハワイ人のことば *tamana* に由来する。アンナは同じ時代から住み着いた英語圏人の *onion*（ねぎ）が訛った単語である。ウェントルも英語の訛語であり、冬の間でも島周辺で捕れる未成熟のウミガメを表す *winter turtle* に由来する。コブノキ（シマホルトノキ）やアイツバラ（スマ）は一八七〇年代に定住した八丈島民が持つべきた言い方である。グリーンペペ（光るきのこ）は一九七〇年代に新新島民（**迷**）が意図的につくった人工語である。そしてセーレー（仲間に入れて！）は起源が不明な謎の表現である。

言語に見る小笠原の時空間

小笠原ことばのなかには、地域独特な言い方として意識されていないいわゆる「擬似標準語」も含まれている。例えば観光客がスパーの前の「今便」という表示（写真9）を見かけたら、果たして指定されている期間がいつからいつまでか読み取れるだろうか。島



写真9 島の厩による「今便」という表示



写真10 商店の定休日「出港翌日」



写真8 小笠原高校のビーデ祭

独特の暦では、「曜日」よりも船のスケジュールによって生活のリズムが刻まれるので、商店の定休日から郵便局の「内地」（本土）行き郵便投函の締め切り日までは「月水金」で言い表されるのではなく「出港翌日」や「入港中」として表現される（写真10）。このように島でしか通じない「隠れた小笠原ことば」は時間だけではなく空間的表現にも現れる。「内地では……」と聞いた観光客は不思議がるかもしれないが、意味は通じる。一方、会話で「七時にセンマチで」と聞いた内地の人は、地図に表記されていないこの場所に辿り着くのは無理であろう。写真11のように漢字を使った掲示板を見て初めて、これは「船客待合所」の通称であることに気づくであろう。さて、ここで逆に小笠原ことばが使われない意味領域について考察したい。沖縄県各地ではメンソーレ、オーリトリ、ンミヤーチのような歓迎の挨拶ことばが目につく。小笠原と同じ東京都に属する伊豆諸島にはオジャリヤレ（八丈島）やおモウヨウ（青ヶ島）、ヨツチャーレ（神津島）といった挨拶ことばが観光客向けに使われているのを見かけるが、小笠原には「こんにちは」や「いらっしやいませ」に当たる歓迎の挨拶が存在しない。その代わりに、別れの挨拶であるマタミルヨ（ま

たね!)が島特製のTシャツなどで使われることがある(写真12)。

魅力の幅を広げる小笠原ことば

小笠原ことばは観光資源として利用されていないものの、将来的にその活用が期待される分野がある。それは海のレジャー産業である。島にはダイビング、ホエールウォッチング、ドルフィン・スイム、シュノーケリング、釣り、無人島巡りや磯渡しなど、海を活用した娯楽が多いが、魚名以外に小笠原ことばが観光客に向かって使われることは非常に少ない。しかも、これはボートツアーの関係者が島の言い方を知らないというわけではなさそうだ。確かにこの業種には内地出身者は多いが、彼らの多くは島の漁師に早く溶け込み周辺の海の情報(海流の特徴、危険な水面下の岩や浅瀬、魚礁)を吸収しているので、たいして海に関する小笠原ことばを知っているのである。ただ自分のお客さんはそれらに無関心だと思ひ込んでしまい、彼らに向かって使いたがらないだけかもしれない。

ただ小笠原では独特の海関係のことばが多く使われているから、それを観光資源として生かせないのはもったいない。例を挙げると、ムグル(潜る)やさまざまなニユアンス

写真11 南洋踊り練習会は「船待」で



写真12 マタミルヨ(またね!)



を表現するブナムグル(勢いよく潜る)、ズナムグル(足がぬかるみにずぶとはまる)、ツナムグル(転んでうつ伏せになる)がある。自動詞のノモル(沈む)やその他動詞ノメル(沈める)では、例えば「アンカー(碇)早くブノメロ!」や「この錨はバランスが良いから、海に投げた時に海面に浮きもしないし、海底にノモリもしない」といった表現を耳にすることもある。カヌーのことを小笠原諸島でカノヤカノーと呼ぶのも、母島のロース記念館に行けば知ることができるが、島のガイドがこれを積極的に観光客に向かって使うことも「観光資源としての小笠原ことば」の有効な活用方法であるように思われる。突き棒漁で狙った魚に命中せず、錨が的外れした時に使われる「どんがらしちゃった!」も同様である。

今後、文化ツーリズムがますます盛んになっていくなかで、小笠原ことばを重要な観光資源としてどのように活用するか、具体的な提言が求められるであろう。

(ダニエル・ロンク)

(注)「新新島民」とは西洋や太平洋にルーツを持つ「欧米系島民」や戦前に八丈島など日本から入植した人やその子孫を指す「旧島民」、そして返還直後に移り住んだ「新島民」と区別される最も新しく移住して来た人たちのことを指す小笠原ことば。筆者編著「小笠原学ことばはじめ」に詳しく。

島人のこころ

小笠原を訪れる人々に宿と食事を提供し、海の観光ガイドとしても自然を案内するホエラズ・イン シートピアの主人と、自然の恵みの島食材料と心でもてなす奥さまが、小笠原の暮らしと思いをつづります。

ホエラズ・イン シートピア

筒井 秀法
筒井 映子

島で暮らすということ

筒井 秀法

小笠原がアメリカから日本に返還されて四十四年が過ぎようとしています。私がこの地を初めて訪れたのは返還後三年が過ぎた一九七一年の春、本州では初夏を思わせるような季節でした。南国特有でしょうか、緑濃い山々に原色に近い赤や黄色の花々が太陽の下で眩く咲き、適度に湿った南風が肌をなでてゆく心地よさは格別なものと今でも記憶しています。

自分にとっての原風景

見渡せる広い緑のなかにアメリカ・スタイルの平屋民家がぼつりぼつりと点在する他

は、海岸近くに植えられた防風林だけが目に映る景色でした。そして、人の行き交う大通りには雨が降ってもぬかるむことがないようにと、海岸の白いサンゴ・ダストが敷かれ、その上を歩くたびにサンゴの擦れ合う音が聞こえていたものです。異国を思わせるこの島がかつては日本領土だったとはにわかに信じ難く、一九四五年に太平洋戦争の終結後アメリカ領土として統治され、一九六八年に再び日本に返還されましたが、二十三年間の長きにわたり日本の歴史と分断されたことが、後に小笠原独特の発展を築くことになっていきました。

東京下町から小笠原への都内移転

一〇〇〇キロメートル南の洋上に浮かぶ孤島が東京都と分かりつつも、何もないこの島に大きな憧れを抱いて、いつか島の生活をし



アメリカ・スタイルの平屋民家

てみたいと心に秘めていました。私は東京生まれの下町育ち、四代目の江戸っ子として中央区に住んでいましたが、念願がなつて小笠原を再訪したのは二十四歳の春でした。当時日本復帰後の開発で漁業・農業・土木建築が盛んに行われ、返還後に戻ってきた旧島民たちもそれぞれの職場で働きました。私も生活の糧を得るため商店や漁業のお手伝いをさせていただきながら、念願の島民生活を楽しんでいました。

命と心をつなぐ連絡船

都会に住んでいれば何の不自由もなく過せる毎日とは違い、食品一つ買うにも慎重に選んで決め、月に一度の定期船が来るまでは、数等分に小分けした食料を冷凍保存することが当たり前前の生活に変わっていったものです。全ての物流が月に一度の定期船頼りで、食品、新聞、雑誌、郵便物、生活用品として人、それぞれの島民が待ちわびるものが違って、それをかなえてくれるのが定期船だったのです。物が欲しい、人に会いたいと思う気持ち、いつしか島民を棧橋に集めるようになっていったのです。私はとりわけ家族からの手紙を待ちわびていました。近況をつづった手紙を日付順に読み終え、ほっとした気

持ちで机にしまうのですが、数日して再び読み返すこともしばしばありました。

自然と暮らす

島の暮らしはその日の天気によって左右されながら一日が始まります。雨が降れば畑仕事は休み、波や風があれば出漁を見合わせながらも、みんな笑顔で生き生きと働いています。自然とともに生活し働くということが島民の

皆が同じ認識の下に毎日過ごしているにすぎないので。おおよそ、都会では思いもつかないうような生活ぶりですが、大自然のなかで私たちが生かされて生活をしている素晴らしさを皆知っているのです。台風が近づき荒れ狂う海もあれば、心和む穏やかな日和もあります。

私たちの民宿、心の故郷

現在、私は民宿と海の観光ガイドの仕事をしています。仕事柄お客さまとお話する機会が多いので、時折こんな質問をしてみます。小笠原のどんなところが好きですか？ 交通機関が船しかないから、遠いから、自然がたくさんありそうだから。どの返事も、私がこの島に住み始めた動機と同じく、観光でいらっしゃるお客さまも同じようなきつかけで来

島されているのに驚かされます。来島客の多くは、普

段経験することのない非日常の体験を求めて旅行に出掛けるのではないでしょう。飛行機よりも船、近く

より遠く、都会よりも自然を求めて来島される方々は人としての自分を見つめ直すため、旅行がしたいという衝動に駆られるように思います。それならいっせ、私が旅行者の故郷になろうと思ひ、民宿の経営を始めたのです。憧れの地であつて私自身も観光客だったころの思いを旅行者の方々に伝えることができた、心の故郷にしたいだけではないかと考えたからです。観光地を訪れる楽しみはどこにあるのでしょうか。もちろんその地を訪れるという能動的な行動、そこで発見される非日常的な体験、そして人同士のふれあいだと思っています。これまでに、私が小笠原の自然のなかで経験した多くの感動を、今度



シートピア外観



三日月山から太平洋を望む

はお客さまとともに体験し感動を分かち合うことで更に一歩、心の故郷に近づいていくのではないかと思っています。ややもすれば、現代人は自然から徐々に離れがちに暮らしていても、現代社会のなかで自然回帰を求めながら生活をしているようかがわれまです。自然に敬愛の念を抱き、そのなかで学ばせしさを楽しみながら、二人より多くの人を巻き込みながら、自然とのふれあいの素晴らしさを広めていきたいと思っています。同じ体験を通して共鳴しあう相互関係は、信頼や思いやりを育み、ひいては立場の異なる

る相手を理解しようとするまでに発展すると思っています。

大事にしたい島時間の生活

小笠原は昨年六月、世界自然遺産に登録されました。返還から四十四年が過ぎても、一週間に一度、二十五時間かかる定期船が通う小さな島です。本州から遠いがゆえに、残されてきたたくさんの方々の自然のなかで私たちは生活しています。自然固有の濃さはガラパゴスの百倍ともいわれるこの島が今、大きく変わろうとしています。世界遺産登録後うねりのように押し寄せる観光客が大幅に増え、かつて経験したことのない対応を迫られているからです。今までは多少の不便を感じ、工夫をしながらもゆったりとした島時間の生活を送ってきました。しかし、定期船に加え観光船が矢継ぎ早に入港し商店やお土産店が観光客のにぎわいぶりにうれい悲鳴を上げている状況です。小笠原は遠く、船だけの交通機関であっても、観光客がよなく自然を求めてやってくることに驚きを隠せません。

離島観光のだいご味を共有

小笠原の自然遺産は私たち島民や日本人のものにとどまらず、世界人類の共有財産とし



▶観光船の見送り太鼓
↓見送り風景



で大切に取扱いしなければならず、その責任と誇りを感じ得ずにはいられません。この宝物を世代を超えて未来永劫にわたって引き継いでいくためには、将来を担う子供たちに自然の仕組みを理解する教育の場として、来島客の方々には自然に触れ親しむ場として広めてゆく工夫が何より大切なことと考えます。小さな島、小笠原から世界遺産の舞台をにらんだ時、国境や文化を超えた人類の財産として捉え世界の交流発信地として新たな開拓ができることを期待し、始まったばかりのこの取り組みに私たちは将来を見据えた目標を見失う



お客さまのお出迎え

ことなく推進していくことが未来につながっていくものと信じています。本土から、そして世界中から求められる小笠原の観光の役割は大きく、それに応えるべく知恵を絞り、勇気を持って行動しなくてはならないでしょう。

ゆつくりと過ぎる島時間のなかで自然に身を委ねながら自分を見つめ直す時、島民と語り合い人の優しさに触れた時、真の離島観光のだいご味を経験することでしょう。

(つつい ひでのり)

大自然の恵みと心の栄養

筒井 映子

「長旅お疲れさまでした」の声掛けで始まるお客さまのチェックイン。二十五時間の船旅、決して豪華客船ではない船に揺られ、日本でも最も遠い観光地の小笠原へようこそ。

「船酔いはいませんでしたか？」と尋ねることもいつも決まってしまう。顔色が悪く、元気がないお客さまを見ると心配してしまふ。本当にお疲れさまでした。小笠原の自然が、長かった船旅の疲れを忘れさせてくれますよ。

大自然のなかで生きるということ

そんな自然に囲まれた島に来島して四十年。当時は、生活物質を運ぶ船が一月に二度しかなく、野菜などすぐに食べ尽くし、次の船が入港するまで、ニンジン、ジャガイモなど根

菜を食べて生活していました。そんな時、お百姓さんがとりたてのセロリを軽トラックに載せて販売しに来ました。あまり好きではなかったセロリでしたが、とりたてがうれしく買い求めました。食べてびつくり、こんなにおいしいかったんだ。今まで食べていたセロリとはまるで別物。一本売りではなく大きな株売りだったけれどすぐに完食。あの味は絶対に忘れられない！ 今ではあのころの大きな株ではないが、やはり島セロリは最高だと思う。

島食材料理を響^{きょう}して三十五年

こういうおいしい島食材料理を使って料理を作り、お客さまに食べていただく民宿を始めて三十五年。昭和五十五年ごろのこの島は今のよう^{よう}に島食材料の野菜は豊富ではなかった。けれど魚だけはどこにも負けない絶品！ 水揚げ中の魚を買い求め、調理をしてお客さまに食べていただく。今こそ小笠原村の観光の基軸であるエコツーリズムの地産地消に当たるが、当時は魚しかなかったように思える。とりたての魚をいろいろ工夫して調理していた時間が長かった。

次第に農作物が増えてきて、今のよう^{よう}に魚とともに料理をして提供できるようになったと思う。この島食材料の調理がとっても楽しい。

↓
鳥食材の夕食
→
夕食時のメニュー
ボード



料理勉強会風景

料理研究で活発な女性コミュニティ

商工会女性部では、女性ならではの事業を考え、鳥食材を使った料理づくりを勉強し、レシピ集の作成まで至った。私は魚料理が得意だが野菜関係の料理は勉強不足。鳥野菜を使った料理を持ち寄り昼食会を開催。こんな調理法があったのかと、野菜の味や食感の生かし方を教わった。目で見ても勉強、食べて勉強。充実した楽しい昼食会を何度か開催した。私が出した料理を家で作り、味の違いを尋ねられた。部員さんの熱意に感心。そういう私も学んだ料理をもう一工夫して、民宿のお客さまに食べていただく。「おいしい」と言われます」と言いながら、心の中でガッツポーズ。部員さんたちとともに真剣に取り組んだことがあったと思う。明日は何を召し上がっていただくかと考えている時が至福の時。

心の栄養を満たす自然の恵み

それにしても鳥食材には感心する。内地もとの違いは、やはり一〇〇〇キロ離れたこの地にあると思う。大海原からとりたての魚、太陽を燦々と浴びて育った野菜。それを食している私たちは、きっと心の栄養も満たされ

ていると思う。

食べ物ばかりではなく日常生活のなかにも満たされるものがある。夕日がきれいに焼けている時など、どんなに忙しくても仕事の手を休め、夕日に見入ってしまう。あまりにきれいなので主人や息子を呼び、皆で夕日に染まってしまう。海の色も空の色も住んでい

自然遺産登録後も変えたくないこと

その鳥が、世界自然遺産に登録された。多くの観光客が来島。宿も船が入港するたびに忙しい日が続いている。そのせいか、今まで普通にあった鳥野菜などが、なかなか手に入らなくなった。魚は心配したことがないが、世界遺産登録の影響がこのような形で現れるとは思っていなかった。島での大自然の観光はどのお客さまにも平等だと思う。その旅行に付加価値をつけるのがおもしろいと思う。鳥食材を使ったお料理でもてなしをしている私たちには困った問題点だ。手に入るものを創意工夫して提供し、お客さまの満足度を上げていきたいと思う。そしてこういうお料理を、嫁や孫に伝えていくことが大切なことだと思っている。

(ついつい えいこ)

母島を愛するといふこと

小笠原母島を訪れる人々を石門に案内するガイドとして住民としての思いを母が、幼くして母島に移り住み、自然と優しい島人に囲まれてのびのびと育った娘が母島を大切にしたい思いをつづります。

フィールドエスコート h i r o o 代表

小笠原母島育ちの筑波大学生

梅野 ひろみ

梅野 なぎさ

母島に暮らす 住民として、ガイドとして

梅野 ひろみ

「母島のご出身なのですか?」。ガイドをしていて、ほぼ一〇〇%こう聞かれるが、残念ながら私は母島出身ではない。小笠原の多くのガイドがそうであるように、私も小笠原に「はまった」者の一人である。一九八八年、私は短期のアルバイトで来島して以来、すっかり母島の虜(とら)になり、一九九六年に家族三人で母島に移住した。母島に移住する決心をしたのは、娘を自然豊かで人情が厚い母島で育てたかったからだ。

母島の自然ガイドとしての出発

私は、学校の部活動で三年間にわたり故郷

の野草の植生調査をした体験から、母島に移住してからも亜熱帯の島の植物に強い興味を覚えた。そして、母島の固有植物に魅了され、島内を歩き回るうちに自然ガイドになった。ちょうど小笠原村では「東京都認定自然ガイド制度」が導入されるころで、二〇〇三年、私は第一期生としてガイド講習を受けた。石門地域のガイド認定を受けた。

その後、現在まで母島では六十七名がガイド認定



【ハハジマメグロ】国指定特別天然記念物で、母島列島の3つの島だけに生息する

されたが、そのうち職業ガイドとして母島で活動している人は十名ほどである。

絶滅危惧種が多い 母島でのガイド活動

父島・母島ともに海洋島であるが、それぞれの島独自の固有生物も多く、それらは絶滅危惧種だ。日本国内には二〇一二年現在、国内希少野生動物植物種が全部で九十九種類ある。それらは「絶滅のおそれのある野生動物植物の種の保存に関する法律」のもと保護されている動物植物であるが、小笠原諸島では、そのうち二十二種もの生物が指定されている。

母島の鳥類ではアカガシラカラスバト、オガサワラノスリ、オガサワラカワヒワ、ハハジマメグロ

が指定されており、昆虫類ではオガサワラシジミ、ハナタカトンボ、植物ではシマカコソウ、ホシツルラン、タイヨウフウトウカズラ等が指定されている。母島の東京都認定自然ガイドは、これらの生物の魅力を来島するゲストに紹介しつつも、採取や密猟等の被害から守る役割も担っている。

石門に優しい観光とは

私が案内している石門地域は桑ノ木山一帯とともに、かつて固有種のオガサワラグワヤシマホルトノキ等の樹木が多く自生し小笠原の原生の森としての価値が高かったことが

ら、一九三二年に学術保護林に設定された後、一九九四年には当時国内には二十一カ所であった森林生態系保護地域の一カ所として「小笠原母島東岸森林生態系保護地域」に設定された（二〇二二年現在、小笠原諸島の国有林の全域が森林生態系保護地域である）。

こうした貴重な生物の宝庫である石門地域を利用する上では、観光利用によるインパクトを最小限にとどめなくてはならない。そのため、東京都認定自然ガイド制度の運用が開始されると同時に、母島では「母島自然ガイド運営協議会」が設立され、母島の自然ガイドらが中心となって、石門を適正に利用する

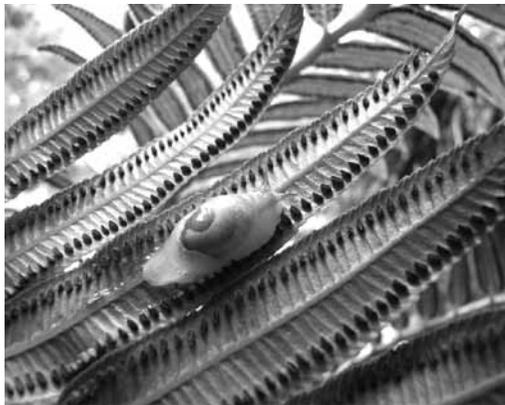
ための「母島自主ルール」が検討・施行された。

自主ルールの主な内容については、入林の際の手続き事項の他、希少動物の保護事項としてアカガシラカラスバトの繁殖期の入林の禁止（十月から二月まで）や、アカガシラカラスバトを撮影する場合の注意事項、携帯トイレの携行等が定められている。この他、ガイドは石門に入林する際に自然の異変やツアアのタイムテーブルを記入するための報告用紙を受け取り、利用ルートのモニタリングも行いながらツアーを催行している。

また、石門は一日の最大利用者を五十名までに設定しており、一名のガイドが引率



【シマホルトノキ】小笠原固有種。湿性高木林に多く「コブノキ」の愛称で親しまれる



【オガサワラオカモノアラガイ】国指定天然記念物。母島の雲霧林に生息

できるゲストも五名までとなっている。そのため、常に少人数でのガイドツアーが催行されている。自然ガイド制度が運用開始された二〇〇三年の石門地域の一年間の利用者は七十二名であったが、世界自然遺産に登録された二〇一一年には二百七十二名が石門地域を利用しており、運用開始時に比べるとガイドツアーでの利用者数は約四倍の増加である。増加後の問題点を整理し今後も適正に利用したい。

私たちが守るべきもの

世界自然遺産登録後には「小笠原が登録されて良かったですか？」というゲストからの質問が多かったが、私が確信を持って「良かった」といえることは、世界にこの自然の素晴らしさが認められた小笠原では、今まで行ってきた外来種駆除や自然再生事業が未来継続的に行われるであろう、ということだった。私も外来種樹木のアカギの駆除事業や希少昆虫の保護事業に携わっているが、母島の貴重な自然を守り地球の財産として未来に引き継ぐためには、今まで以上に母島の島民や行政や来島するゲストの、自然環境の保全等への深い理解やたゆまぬ努力が必要になってくる。

そして、もう一つ守りたいのは、島民とゲストの触れ合いだ。ガジュマルの木陰で島民とゲストが語らう母島の風景は、私が初めて母島を訪れた時と今も変わっていない。

このガジュマルの木の下で、私は母島についてどれほどたくさんのことを学んだことがガイドブックには載っていないような、とっておきの話は、島民との語らいのなかにあるといつてもいいだろう。通信の発達で母島の人々の生活は便利になる一方で忙しくなってしまう、のんびり感が失われつつあるが、木陰でホッとする気持ちを忘れずに、訪れるゲストを温かい心でもてなす島であり続けたいと思う。

(うめの ひろみ)

母島育ちの目に映る 自然の輝きと人の優しさ

梅野 なぎさ

を、日々実感させられる。

幼少時代を振り返って

私は、五歳から十八歳までの十三年間を小笠原で過ごしてきた。ショッピングセンターも、テーマパークもない島だ。上京してから

先日、有名チェーンの本屋の店頭に「小笠原諸島特集」と大きく書かれた雑誌が平積みされているのを目にして、驚いた。出身地を告げて、首をかしげられることも少なくなつた。育つた小笠原から離れた三年が経つ今、故郷が世界自然遺産になったのだということ



ガジュマルに集まる子供たち (公益財団法人日本交通公社 寺崎竜雄撮影)



服を着たまま海で泳ぐ島っ子たち

できた友達に島の様子を説明すると、一体何をして遊んでいたのかと聞かれることが多い。そのたび思い返してみれば、幼少時代の記憶は、いつも豊かな自然と温かい人々とともにある。小笠原では小学校に上がる前の子供たちも皆、浮輪をつけずに泳ぐ。私も海に潜っては魚を素手で捕まえてその場で食べた。飛び込む高さを競ったりして遊んでいた。ガジュマルの木の上に秘密基地を作り、危ないと怒られたことも懐かしい。「遊び場」が用意されていなくとも、子供が集まれば自然に遊びは生まれてくるものだ。そしてその様子は、知らず知らずのうちに島民皆に気にか

けられ、見守られていた。

都心では、小学校に入る前の子供たちが、子供だけで遊ぶ姿をほとんど見ない。当時は自分の生活環境が当たり前のものだと思っていたが、島を離れて初めて、それがどれほど恵まれたものだったのかということを知り知った。

固有種の保護活動を経験して

誰もが、初めてのアルバイト経験というのは印象深く忘れられないものだろう。私のそれは、小笠原の固有植物の育苗いっくびょうだった。

幼いころからずっと側にあるものほどその貴重さに気づかないもので、当時は、とりわけ小笠原の植物に興味もなく、固有種のほとんどの名前も見分け方も知らなかった。

だが、苗を世話するなかで自然と名前を覚え始め、それぞれの特性を覚えていただき植物への知識も深まった。どのような気候を好むのか、水はどれほど与えれば良いのか、人を知る過程と同じように植物の「性格」を理解することは、次第にそのものへの愛着を強めた。

固有種の育苗の主な目的は、希少植物の保護増殖や根付きやすく成長速度の速い植物を育成し、植林するためだ。外来種の駆除

活動の効果もあり、近年ではノヤギも少なくなってきたようだが、当時はノヤギの食害により植物がほとんど生えていない山も多く見受けられた。私の活動していたNPO法人では、そうした地域に対しての自然再生事業を請け負っていた。

いつまでも母島であってほしい

固有植物が減衰した山を復元するには、多くの人手と歳月を要する。苗の植栽作業は何十人もの島民によるボランティアによって行われた。参加する人々は、子供からお年寄りまで年齢も職業もさまざまだが、共通するのは島を愛する気持ちと、「自分たちができることを」という志だろう。私たちが生きている間には、山が本来の状態を取り戻した姿は見られないかもしれない。それでも、未来の世代のために今できることを一つずつ行っていくことが必要なのだ。

三年間にわたる固有種の育苗経験によって、私の小笠原への思いは強くなった。子供のころにあった風景は、決して「当たり前」のものではなかった。私が幼いころに遊んでいた海も、山も、「誰か」によって守られ、育まれてきたものだった。そのことに身をもつて気づかされ、何も知らずに恩恵だけを受

けていたことがふがいないかった。
絶滅の危機は生物自身で回避できる問題ではない。これからも、人々の地道な努力によって保全されることが求められる。

観光地としての母島

世界自然遺産への登録と同時に、さまざまなメディアが、従来ほとんど注目されなかったのなかつた母島の姿を映し出すようになった。それと並行するように、確実に母島への観光客数も増加しているようだ。今まで母島



ははじま丸の見送り。島民の「行ってらっしゃい!」の声に「行ってきます!」と応えるゲストたち

への渡航船は、百四十三人の定員に対し乗船客数が数人程度の時もあったが、現在では切符が売り切れることもあるという。世界自然遺産効果とメディアの影響の大きさを再認識させられる。

小笠原の豊かな自然を多くの人々に体感してもらえることも、メディアに美しく映し出されることも、大変うれしいことだ。自分が育ってきた土地の良さを認められたようで、誇らしくもある。

だが今までは二ーズの異なる観光客の来島と、環境への影響も懸念している。実際に世界自然遺産登録後の母島で固有種の木の枝が何本も折られるという事件も発生しており、残念でならない。このような事態は、世界自然遺産効果のマイナスの側面だといえる。以前は母島の情報が乏しく、自ら入念に調べた上で訪れる観光客が多かったが、現在は知名度に引き寄せられて来島される方も多い。新しいルール作りや規制の強化も検討されているようだが、私は島民と観光客の交流のなかに、解決策を見いだすことに期待したい。

母島への思い

私が以前、環境保護の現実を知ったことで小笠原への愛着を深め、意識が変化したよう



母島前浜での風景

に、「知る」ことで貴重な自然の価値認識は可能になると考える。知れば知るほど慈しむ心は生まれる。島民と観光客の語らいが多い母島では、「知る」機会が多く用意されているはずだ。それだけに、島民も今まで以上に島への理解を深め、伝える必要がある。

私も今後学び続け、島外からも小笠原の魅力と自然の貴重さを発信していきたい。平和な母島が失われることなく、いつか帰る日には変わらず美しい風景が迎えてくれることを、心から願っている。

(うめの なぎさ)

日本の亜熱帯・小笠原が惹きつける魅力

小笠原諸島の自然・文化を守る勇気と観光をロード・ハウに学ぶ

ノンフィクション作家

飯田 辰彦

四半世紀前、私は先代の「おがさわら丸」に乗って、初めて小笠原の地を踏んだ。仕事柄、海外へ出かける機会が多く、長旅には慣れていたので、父島への航海が三〇時間近くかかると聞いても、さほど驚きはしなかった。乗り継ぎも時差もない分、体力の負担も小さく、と高をくくっていたくらいだ。

つらい旅の先にあるからこそ

魅了する小笠原

だが、私は迂闊にも、移動手段が船であることを見くびっていた。東京湾を出たあたりから、通過する低気圧の影響をもちに受け、三五〇トンのおがさわら丸は文字通り木の葉のように波浪に翻弄され続けた。出航して間もなく摂った昼食を最後に、あとはひたすら船室で横になっているしかなかった。少しでも体を起こそうものなら、たちどころに

船酔いが襲いかかってくる。学生時代、しばしば横浜―ナホトカ航路のソ連船を利用したが、その時の苦しい船旅がまざまざとよみがえってきた。

夜中を回ったところ、船のエンジン音がとにかくに穏やかになり、船体の揺れもウソのように収まった。低気圧の帯を抜けたのだ。しばしの熟睡をむさぼったところで、船室の異様な明るさに驚き、跳び起きた。甲板に出れば、快晴の空に目もくらむような太陽光線。船の周囲三六〇度は、全て海。分かりきっていたことだが、現実にもその場（東京から一〇〇〇キロ）に身を置くと、本土との想像以上の落差にたじろぎ、言いようのない興奮を覚えた。一昼夜の船旅が、見事にこのたくらまざるドラマを演出していたのである。

やがて、進路左手に聳島列島のささやかな島影が見えてくる。そのあとに父島列島……。

何もない大海原に、こうした舞台装置が忽然と現れる自然のシナリオは、人知で仕組まれたものではないだけに、いっそう興味が深い。小笠原の魅力は、人それぞれに感じ方が異なると当然だが、私がこの離島に通いつめる第一の理由は、不便の上ない一昼夜の船旅にこそある。逆説的な言い方で恐縮だが、もし小笠原に空港ができていたら、私はここまで孤島通いに入れ込むことはなかっただろう。

小笠原の旅への覚悟

つまり、父島への不便な船旅は旅人（広い意味での観光）にとつて、決してマイナスの動機にはなっていないということである。小笠原に通い始めたころ、船中で知り合う若者たち（私も当時は若かった）には一つの類型があることに気づいた。他の旅先とは異なり、小笠原はいくら旅程に工夫を凝らそうと思っ

でも、最初から渡航手段としてはおがさわら丸しかなく、その運航スケジュールに添った計画しか立てられない。当時も今も、小笠原への旅を実践に移そうとしたら、最短でも五日間が必要となる。それを承知で乗船していく若い旅客たちは、一様にどこか気分的に吹っ切れているように映ったものだ。

事実、船中で親しくなった彼らのなかには、会社を辞めたばかりで、この時とばかりに小笠原を目指す者が少なくなかった。再就職する前に、容易には行けない小笠原への旅を果たそうというわけである。また、有給（休暇）をたっぷりため込んで、その全てを今回の航海に費やそうという熱烈な小笠原信者もかなりいる。こうした「猛者」たちは、航海（五日間）などといったケチな旅程は立てておらず、たいてい二航海、もしくは三航海分も島に滞在する気で小笠原を目指しているのである。

ここまでの覚悟をもって乗船してくる彼らであつてみれば、一昼夜の航海の後に遭遇する「落差」に感激しないはずはない。圧倒的な陽光の明るさ、見渡す限りの水面に隔絶された清々しいまでの孤独感、そして上陸して覚える居たたまれないほどの解放感……。その解放感がよって来るところのものが何であるか、旅人はやがて理解することになる。

島に人が住み始めたのが、ようやく一九世紀半ばというごく浅い歴史と、手つかずに近い瑞々しい島の自然が、人の心を奥底から解きほぐすのだ。琉球弧の島々との決定的な違いがここにある。それかあらぬか、沖縄の島旅を卒業して、さてどこに行こうかと考えあぐねた末に小笠原に来た、という若者がけっこう多い。

小笠原時間へのタイムスリップ

わずか一航海の旅であつても、小笠原が究極の楽園であることは、容易に理解できるはずだ。その証拠に、ここでは日本のどこよりも時間の流れるスピードが極端にのろい。いったんこのペースにはまってしまうと、簡単には元に戻れない。だから、満を持して小笠原にやってくる旅人は、往々にしてこの「小笠原時間」の心地よさに身も心も奪われて、本土に帰る気力がすっかり萎え、結局定住を決め込むという事例が頻繁に見受けられるのである。

裏を返せば、小笠原という土地は、最も日本らしくない風土性を有する場所、ということが出来る。ここへは本土の時間的感覚を持ち込むことは決してできないし、また本土並みの便利さをここで望むことも、これまたで

きない相談だ。こうした緩い時間の流れは、海外のリゾート地ではしごく当たり前のものだが、こと国ごと自転車操業で回っている日本では、じつに稀有なケースといえるだろう。つまり、小笠原の小笠原たるゆえんは、まさにこのノックリと流れる時間にこそあるのである。

独自の生態系が魅せる豊かな自然

こうした独自の時間の流れに加え、小笠原は「海洋島」という成因に由来する特有のファウナ（動物相）（注1）とフロラ（植物相）（注2）で知られている。つまり、固有種の宝庫となっていて、ために小笠原は「東洋のガラパゴス」と異称されるのである。島のフロラについては拙著『東京都ガラパゴス』で詳しく触れたが、一二〇種余りという固有種の数の多さもさることながら、そのつややかなジャングルにひっそりと咲き誇る亜熱帯の花の無垢の美しさは、また例えようがない。白のムニンノボタン、ピンクのハハジマノボタン、深紅のムニンフトモモ……。思い出すだけでも、体が熱くなる。

一方、小笠原にやってくる若者の多くがダイビング目的であることから分かるように、海の魅力も陸（ジャングル）のそれに劣



写真1 亜熱帯特有の植生を見せるロード・ハウの内陸部

らない。サンゴ礁が発達していない代わりに、小笠原の島では陸地に接して急深の海がつか

がっているため、海岸のほんの目と鼻の先のところ、大型の回遊魚に遭遇することができ

る。本格的なダイビングでなくても、シユノーケルひとつで目くるめく水中のワンダー

ランドをのぞくことが可能なのである。地理的にも、また自然環境の面においても、

小笠原が有する独自性をしっかり認識できるならば、今後この貴重な島々が目指すべきツ

録は一つの通過点にすぎず、小笠原の本当の挑戦はこれから始まるものと考えたい。

小笠原のあり続けてほしい姿

—ロード・ハウ

小笠原のあるべき近未来の姿をイメージする時、私の脳裏で常にダブる風景がある。それはオーストラリア東海岸、シドニーの北東七〇〇キロのタスマン海に浮かぶ孤島、ロード・ハウのありようである。

この島の成因も小笠原と同じ海底火山起源の海洋島で、人が住み始めた記録も



写真2 リーフの浅海が発達したロード・ハウ島の西海岸

一八三三〜三四年ごろからというから、小笠原の歴史とじつによく似ている。亜熱帯という気象条件も同じだ。一九八二年には、その希少で貴重な動植物の宝庫（やはり固有種が多い）という理由で、小笠原に三〇年も先駆けて世界自然遺産に登録されている。ロード・ハウは二八の島からなる群島で、その主

島であるロード・ハウ島は東西二八キロ、南北二一キロの細長い島。島民は三〇〇人弱、一日に島で宿泊できる観光客数も四〇〇人までと制限されている。ちなみに、島には大型ホテルはない。アパートメント・タイプから高級ロッジまで全部で一七軒。

島には他にもさまざまな規制がある。建物は全て一階建てで、一家族あたりの車保有台数は一台のみと決められている。しかも、島内の運転スピードは車、自転車とも時速二五キロまで。島民は、これら決め事を世界遺産の島を守るための当然のルールと、割り切っている。ロード・ハウでは二一九種の植物が確認されていて、うち七四が固有種といわれている。しかし、ロード・ハウの自然の価値を特徴づけているのは、鳥類の楽園としての群島の存在感だ。じつに二一九種の鳥が棲み、そのうち一四種が島の断崖などで繁殖期を送る海鳥である。中には貴重なロード・ハウの固有種も多い。

自然保全と観光は パラドックスな関係か

群島の固有種として特に有名なのは、飛べない陸鳥、ロード・ハウ・クイナだろう。ニュージーランドのキーウイに似たこの鳥は、



写真3 バードウォッチング・ツアーの名ガイド、クライブ・ウィルソンさん(中央)

一時はイノシシが卵や雛を襲うために二八羽にまで減って、絶滅の危機にさらされた。その後、人工繁殖により雛を七四羽にまで増やすことに成功し、さらに現在では三〇〇羽を越えるまでに回復している。

「これからは、日本人客にもぜひこの島の魅力を知ってほしいと思っているわ。その半面、島のよき伝統、手つかずの自然をずっと守りたいという思いも強い。世界遺産の島の誇りもあるから……」

「バインツリーズ・ホテル」の女性オーナー、ケリー・マックフアーディアンがこう複雑な胸の内を語ったことがあった。島内を歩いてみれば分かることだが、ここは単なるリゾートの島ではなく、古風でさえある民俗社会が現に生きている。同じく浅い歴史の島とはいえ、小笠原にも既に「固有の民俗」と化したかぐわしい孤島の暮らしが根付いている。双方には規模（面積や人口）の違いもあり、同列に語ることでできない部分もあるが、世界



写真4 観光ボートから下りて
トレッキング・コースへ
向かうツアー客

遺産の先輩として、ロード・ハウには小笠原が見習うべき点が多いと考える。

未来の姿を描くために越える波頭

前半でしつこく書いたとおり、小笠原にとっての船旅の意味の大きさが理解できれば、空港（つまり航空路）などないほうがいいに決まっている。こう書くと、島に緊急事態等（例えば重篤の病人）が発生した場合、本土への搬送のためにも空港は必須ではないか、という議論が必ず出てくる。ちょっと待ってほしい。急病人対策なら、医療機関を充実させることで、いくらでも対応はできる。一方、島民や旅人を魅了する、この国には稀有な小笠原の自然や暮らしては、一度壊したら元に戻らない。パインツリーズのケリーが危惧するのも、まさにその点に他ならない。

単純に空港はいけないもの、と言っているのではない。現実にはロード・ハウは既に空港を有している。肝心なことは、船か飛行機かということではなく、その土地のあるべき未来の姿を明確に描けるか否かということなのだ。マスタープランを持ち得るかどうかと言いつてもいいかもしれない。これは日本人が最も苦手とする「作業」であり、そこに民族的な能力の欠如を見るのは、うがちに過ぎ

るだろうか。

私は戦前までの「農業の島」としての小笠原を知っている。今また、亜熱帯農業を志す多くの若者がいることも知っている。この特別な「戦力」の前に壁となって立ちほだかるのが、不在地主の存在だ。諸島のかんりの面積が既に大手企業に買い占められている、と聞く。仮に空港が完成していたら、小笠原はどんな変貌を遂げていただろうか。マスタープランが必要とされるゆえんが、ここにある。

変わらずにあつてほしい小笠原

さて、そろそろ今年も小笠原高気圧がせり出し始める、小笠原のベストシーズンがやって来る。願わくは、長時間の船旅も、極端にのろい時間の流れも、また固有種の植物たちの輝きも、ずっと変わらずにあつてほしい。それを楽しむための覚悟と忍耐は、南海シンドロームに侵されたわれわれ小笠原党信者には、とうにそなわっている。楽園には、楽園に通うための作法があるのである。

(いいだ たつひこ)

(注1)ファウナ(動物相)：特定の地域に生息する動物の種類組成

(注2)フロラ(植物相)：特定の地域に生育する植物の種類組成(いずれも一般財団法人環境情報センターホームページ EIC ネット環境用語集による)



連載 I
あの町この町
第 50 回

環境資源 —— 鳥取県智頭町

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀
(イラスト) 著者

智頭町のある鳥取県東南部を八頭郡とい
つて、現在は八頭町、若桜町、智頭町の三町
のみだが、「平成の大合併」までは八町村を
数えた。八つの「頭」から成るので「八頭」
なのか。しかし明治半ばまでは八東郡、八
上郡、智頭郡であったものを、明治二十九年
(二八九六)の合併で八頭郡ができたとい
うから、八町村説はあたらぬ。それにしても
郡名に「八」がつくのが多いのはどうしてだ
ろう？

町域の九三%が山林で、人口約八千人。
林業の町として知られてきた。中心部は鳥
取と畿内を結ぶ智頭街道の宿場町として発
展した。吉野と並ぶ杉の産地だったが、山林
が見捨てられて久しいのだ。またクルマ社会
にあつて旧の宿場町は、ただ車と人が通り過
ぎるだけ——。

いや、ちがう。鳥取県智頭町は、もっと

もいかたちで町づくりに成功した一つだろ
う。国の政策が集約と効率第一、周辺部切り
捨てのなかで、智頭町は大にづくことを求め
ず自立を選んだ。林業はふるわなくとも山
林の町は凋落しなかつたし、むしろ新しい可
能性をひめている。旧宿場はものさびしい廃
市とはならず、いれかわりたちかわり人がや
ってくる。そして町おこしは中心部にかぎら
ず、山あいの小さな町全域に及んでいる。

もし「観光スポット」を数えるなら、いた
つて貧しい。目ぼしい見ものは石谷家とい
つて国登録重要文化財になっている元大庄屋の
建物ぐらいいで、神社仏閣に国宝クラスの何が
あるわけではない。「歴史の道百選」に選ば
れた智頭往来にしても、全国百カ所ある一つ
にすぎず、それも旧宿内はほんの一キロた
ら。千代川沿いの桜土手はソメイヨシノが計
一八〇本。この程度の名所なら日本中のあち

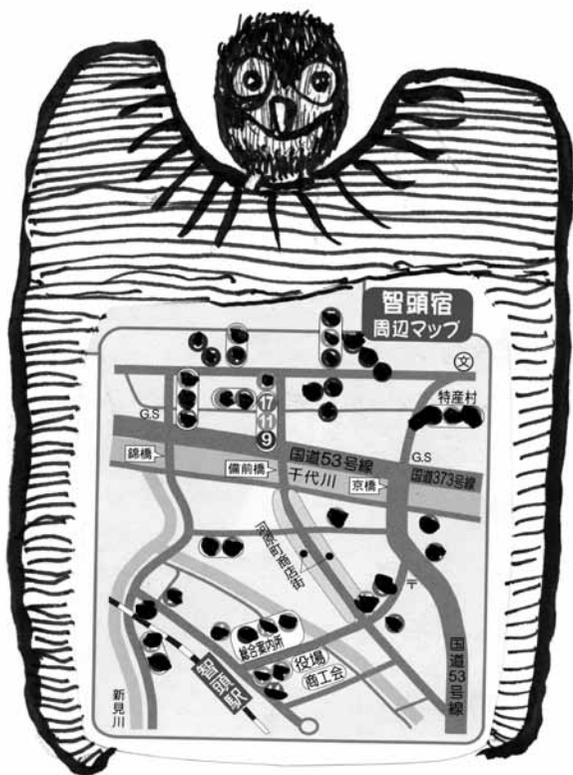
こちらにあるだろう。「西河克己映画記念館」
があるが、小さな洋館に撮影現場のスナック
写真やポスターを並べただけで、そもそも当
地出身といつても映画監督西河克己は、四歳
のときに家族とともに町を離れ、里帰りし
たのは七十年ちかかったつてからのこと。実質
的には記念すべき何も無い。

にもかかわらず智頭町はとていい町で
ある。歩いていると幸せな気分がして、わざ
と歩調を落としたり、何てことのない一
角で立ちどまつて、何てことのない風景をし
みじみ味わいたくなる。いったい、どうして
こんなぐあいになるのだろうか？

石谷家は屋号を「塩屋」といって、古くは
鳥取城下で塩の卸問屋をしていた。元禄年
間に智頭に移り、宿場問屋と地主経営に乗
り出した。明敏な当主がいたにちがいない。
五代將軍綱吉の治世下であつて、幕藩体制が

かたまり、農業生産が大きく向上、商品経済が飛躍的に発展して、各地に大商人が台頭してきたところである。藩の監視の強いお城下よりも宿場町のほうが自由がきくし、人の行きかう街道町には、さまざまな情報もたらされる。本家石谷には襲名が伝三郎、伝九郎、伝四郎の三つあって、三代で二巡する方式をとっていた。ふつう家名は一つなの

に、どうして三つもあったのか。家の習わしや伝統にこだわらず、代ごとに別式でやれという戒めをこめたものか。
 明和九年（一七七二）、伝三郎が大庄屋に任じられた。藩の政務代行である。裕福で人望がないとつとまらない。つづいて伝九郎が就任。だが、きつちり五十年つとめて文政五年（一八二二）以降は辞退し、分家や他家



智頭町パンフレットより

に譲っている。これも正確に時代を見てのことだろう。幕藩体制がキシミだし、農民一揆があちこちで起きはじめていた。農民が真っ先に不満をぶつけるのは代行役の大庄屋であって、お役をつとめてロクなことはないのである。

明治以後は山林経営と銀行業、そして政治家として活躍。鉄道の時代になって街道がさびれると、私財を投じて因美線（大正十二年開通）を実現した。重要文化財の石谷家住宅は、この前後に十年がかりで改築したというが、旧家もつとも栄華を誇ったところの産物であって、敷地三千坪、部屋数は四十にあまり、土蔵七棟。まずは主屋の土間に圧倒される。吹き抜け式で、松の巨木を用いた梁組の豪壮なとききたら、超高層ビルにも匹敵するのだ。上がったところの大きな囲炉裏はたが家人と出入りの人とのサロンになった。

書院座敷の応接間、国登録名勝地の庭園に面した江戸座敷、主人の間、大きな神棚を祀る神殿室、モダンな螺旋階段と吹き抜け空間に架した太鼓橋。十年に及ぶ大工事の間、名のある棟梁がこごとばかりに腕を振ったのではなからうか。

襲名を三つ用意しても旧家を持ちこたえ

るのは並み大抵のことでない。ましてや戦中戦後の厳しい時代に大々的な農地解放があり、代がかわると相続税が待っていた。腕章をつけた説明役の人にそつとたずねると、現当主は東京住まいで、邸宅は町に寄贈され、現在は因幡街道ふるさと振興財団が運営している。

「これだけ大きいとねエ」

家を継ぐことの難しさは、土地の人が一番よく知っている。

「智頭宿周辺マップ」には、石谷家住宅のすぐ前に「御本陣跡」、その左どなりに米原邸、右どなりに伊藤邸とある。まん中に国登録有形文化財の消防屯所。どうして消防団の詰め所が文化財になったりするの？ 木造洋風のつくりが独特で、めったにないしろものなのだ。背後に牛臥山を控え、旧智頭の屋敷街にあつて、さしずめ山の手消防隊のおもむきがあつたと思われる。

ほかにも昭和初期にはやつたアール・デコ調の家や、造り酒屋の重厚な蔵、消防屯所と同じく有形文化財の公民館、古い道しるべ……。

鳥取市と結ぶ幹線国道53号は、旧宿が一望できる関屋番所跡で街道とわかれ、千代川沿いにのびている。車の大半はそちらなの



消防屯所

で、警笛や信号に気をとられることなく、のんびりと町歩きができる。観光バスで来た団体が、旗をもつた人を先頭にゾロゾロと歩いていく。何やら参勤交代の大名行列に似ているのは、観光客こそ現代の大名であるからで、キラびやかにやつてきて、気前よくお土産を買っていく。

三叉路の道標が因幡街道と備前街道の分岐点を告げている。T字型のタテにあたるのが河原町商店街で、さびれきみながら、わび

しい感じはしない。時代の変化はとつくに承知ずみといたたふうで、酒店、薬局、食品店などのほかは店を閉じていても、昔ながらの格子や棧が美しく、店先に「川舟」と呼ばれる木づくりの水槽があつて、澄んだ水が流れ落ちている。静まり返った昼下がりに、サラサラと水音が聞こえるようだ。

板井原集落は町から車で山道を走ること十五分ばかり。牛臥山の一つ山向こうの谷あいには、突如として家並みがあらわれる。深



備前街道の商店街

流と山裾のあいだにひしめき合って、現在は二十数戸だが、かつては四十にあまったそう。昭和三十年代そのままで、高度成長に入る以前の山村集落をよくとどめており、県の伝統的建造物群保存地区に指定されている。

木炭がエネルギー源で、山林が大きな産

業だったころ、わざわざ町から通うよりも山中に住んだほうが効率的である。清流が走り、陽だまりで畑ができる。公民館、学校の分校、神社などがつくられた。時代がかわり、大半の人が出ていってからも町は集落を捨てなかった。自分たちの暮らしと文化を伝える大切な「生き証人」であるからだ。

智頭町は行政関係者には、「ひまわりシステム発祥の地」として知られている。郵便局の外務職員が郵便物を届ける際、ひとり暮らしの高齢者の用事を聞いてサポートするというもの。ヒマワリの花と「日回り」を掛けた命名だろう。今では全国の市町村にひろまっているが、智頭町役場福祉課の発案だった。つづいて企画課が「日本1/0村おこし運動」を呼びかけ、これも評判になった。各集落が0から1へ一歩踏み出して、みずから地域の特色を掘り起こそうというのだ。「一村一品」に似ているが、物品の生産にかぎらなくてもいい。集落ごとに地区振興協議会がつくられ、0から1への運動がはじまった。

「みどりの風が吹く、疎開のまち」

カラー八頁のパンフレットが小さな写真カットで「智頭遺産」を収めている。地区の人々があらためて自分たちの住む環境を見直し、町の資源として誇らかに提出した。板井原の杉木立、真鹿野の山麓風景、波多の台のススキ草原、毛谷の古民家、篠坂の切り通し岩……。写真提供者の名前が掲げられている。上田勝利さん、小林悦次さん、玉木将雄さん……。お名前からして世代とおトシがほぼわかる。

四方を千メートル前後の山に囲まれ、お

かたの集落は山裾にある。それぞれの地形に
応じて家を建て、植林し、農地を開いた。近
年は「里山」といった言い方をされるが、人
と自然が共生するなかで特有の景観が形成
されてきた。それを「環境資源」と名づけて、
どうしていけないことがある。豊乗寺の大
杉とマキ、北股川の河畔樹、ミズナラ、那岐
神社の社叢、道ばたの柿の太木。農地や集
落近くにあつて、ランドマークの役目を果た
してきた。そんな古木や杜が、いわば「原日
本的風景」を生み出している。山、川、集落、
里。名もないスポットながら、日本人なら誰
もが懐かしく思い、いしれぬ郷愁を覚える
景観である。それを自分たちの環境資源と
して誇っていけないわけがあるか。

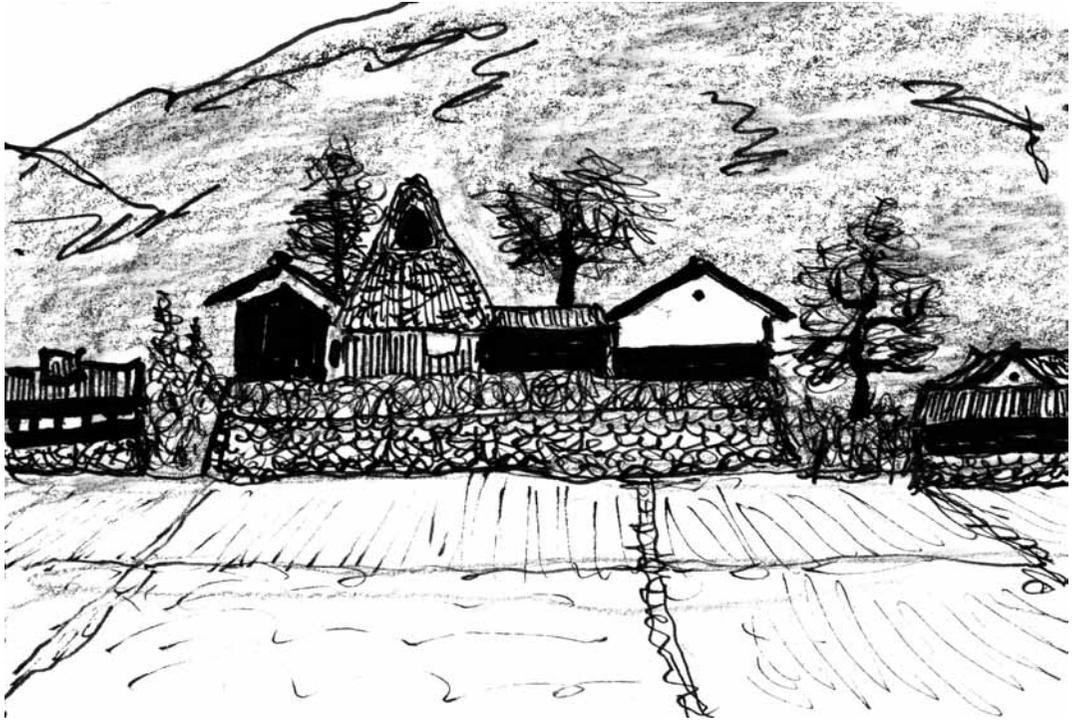
智頭街道は町を出ると一路南下する。観
音堂のある中原、副ヶ滝、ついで駒畑。昔は
最奥の宿場村で、ここで馬を帰したのでろう。
志戸坂峠までの念仏岩、泣き地蔵が、かつて
の旅の厳しさをしのばせる。今ではトンネル
まで車で走り上がるが、おりおりハツとする
ような景色があらわれるのだ。石垣を築いて
家をつくった。古民家に特有のやさしさと確
固とした造形美が目底にやきついてくる。
それはまわりの梅の木や柿林と、さらに背後
の杉林ともあざやかに調和しており、長い歳

月のなかではぐくまれてきたものだ。日本人
が「ふるさと」というとき、きつと思ひ起こ
す記憶の原型にひとしい。「智頭町全域マッ
プ」には、「奥西のお茶とヤーコン栽培」「五
月田の栃ようかん、地蔵餅」「市瀬の花づくり」
「中島の伝承館」などと、それぞれの集落に
村おこし運動の成果が添えてある。

「私たちの集落はたった十三軒しかないじゃが」
五月田農産加工所の案内によると、小さ
な山里は標高二二五メートルの那岐山の麓
にあつて寒暖の差が大きい、米づくりには絶
好の気候で、「鈴原糰」というもち米ができる。
これでつくったしる餅はきめがこまかく、な
めらかで、米の甘味が独特だそう。黒豆
を入れて塩味をきかしたのが豆もち。よもぎ、
カボチャ、紫いもなどの味をつめたかきもち、
数秒でトロンととけるシヤブシヤブ餅、ほ
かにもとち餅や土地の名そのままの春五月の
よもぎ餅。あるいは十三軒メンバーの若手が
考案したらしいマロニエ(栃)シフォンケーキ。
カラーのチラシは、現場からの原稿と写真
を町が1/0運動の予算で刷り物にしたの
だろう。智頭駅前前の観光協会にいろいろと取
り揃えてある。情報センターであるとともに
物産館でもあつて、地産のサンプルがところ
狭しと並べてある。

観光協会のとなりがスーパー、向かいが町
役場、農協、消防署、商工会、総合センタ
ー、バス停。広場もそなわつていて、駅をパ
ックに催しや集合ができる。線路の向こうに
町営マンションと保健・医療・福祉の総合セ
ンター、一階のホールは講演会やイベントの
会場になる。駅前という便利なところに、暮
らしに必要な施設がほぼすべてそなわつてい
る。一カ所で用がたせて、買い物をして帰れ
る。大合併のあと、やたらに立派な庁舎を
不便なところに押し立てたケースが多かつた
なかで、智頭町の町づくりには凛とした一本
の筋が通っている。

自分たちの環境資源を再発見してリスト
にしたのも、はつきりした考えあつてのこと
なのだ。先祖から受け継いだ環境遺産を新
しい視点で見直して、今の時代にあらためて
意味を問い直す。さもないと市街地の拡大や
公共工事であつというまに消え失せるし、「大
規模開発」の名のもとに一挙に根だやしにさ
れた例がいくらかもある。人の暮らしがあつて
こそ資源であり、生活様式の変化のなかで、
みるまに荒廃するだろう。少子高齢化はと
どめ難いのだ。廃村のけはいはじりじりと迫
っている。1/0運動が、そんな危機感から
生まれたことはあきらかだ。キャッチフレー



郊外の風景

ズにある「疎開のまち」は、戦争末期に国策として実施された疎開ではもとよりなく、過疎を迫られている土地を開くといった意味ではなからうか。それとも灰色の空の下で暮らす都会人に、みどりの風の町への21世紀的疎開のすすめでもあるのだろうか。

そのうち気がついたが、町には板井原、中原、木原、福原、河津原、米原、郷原、野原、坂原など、「原」のつく集落名がめだつて多いのだ。前につく文字によって「ハラ」「バラ」「ワラ」と言いかえる。山あいにあつて一定の平地を指す言葉なのだろう。とたんに「八」のつく郡名の秘密がわかつたような気がした。八百屋、八十路、七重八重、八百八橋の使い方からもわかるとおり、八は数量ではなく数が多いことをあらわしており、八東郡、八上郡、八頭郡はいずれも多数の集落をもつことの郡名ではあるまいか。

では八頭に対する智頭はどうなのだ？
わが文字解によると、「千世に八千世」の「千」は、これもまたとびきり多くの数を含んでいる。その千を智にとりかえた。その町づくりからすると、町名に智をもつのはダテではないのである。

(いけうち おさむ)



連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り71

旅するベジタリアン

旅行作家

山口 由美

言葉ではなく

食事である

雨期に当たる六月のタイ、目立って多く見かけたのがインド人観光客だった。

中国のような一人っ子政策があるわけではなく、少子化問題も生じていない彼らの家族旅行はとかく大人数で、さらに兄弟・友人や仕事仲間の家族と連れだって旅する習慣があるらしく、団体旅行かと思紛うほどの大人数のグループが多い。昨今の経済成長は、彼らを明らかに海外へと押し出している。それは十年ほど前、中国人・韓国人観光客が増え始めた頃を彷彿させる勢いで、近年、世界各地で実感させられている。

バンコクからプーケットに向かう国内線では、そうしたインド人ファミリーのパワーに

圧倒された。離陸すると間もなく、フライトアテンダントが紙のボックスに入った機内食を配り始める。ベジタリアンなど特別食のミールは、一般の機内食がサーブされる前に一人分ずつ配られるのが普通だが、その日は、あまりにたくさんいたせいか、一般の機内食と一緒にベジサンドのボックスが積み上げられたカートがやってきた。

私の並びの席には子供ばかり四人が座っていたが、驚いたのは、就学前の、ほんの四五歳と思われる男の子が、真剣な表情で「これはベジですか？」と確認していたことだった。こんな小さな頃から、ベジタリアンであることを彼らは自覚しているのである。

教育さえ受けていれば英語を話す彼らは、経済力が伴えば、海外旅行には何の支障もない。だが、唯一、彼らを悩ませるのが食事

の問題らしい。宗教上の理由でさまざまな禁忌があるからだ。

カンボジア国境に近い島にあるソネバキリというリゾートでは、漁村と滝を巡る半日ツアーで、インド人家族の一行と一緒になった。ソネバキリは、タイでも指折りの高級リゾートである。そこに滞在しているということは、いつも手放さない携帯電話でひっきりなしに指示を出している彼のビジネスが、かなりの成功を収めている証なのだろう。聞けば、休暇の旅行は、いつもビジネスパートナーの家族と一緒に、八人の大所帯で出かけているという。

日本人だと言うと、質問攻めにされた。「次の休暇には日本に行きたいと思っただ。ほら、有名な花があったよね。あれを見るのは、いつがいいのかな」

「桜ですね。ならば四月です」

「桜は日本のどこに咲くんない」

「日本のどこでも咲きますよ」

「大阪とか？」

「大阪にも咲くし、京都もいいし。東京にも咲きますよ。でも花の咲く期間は短いから、それに合わせないと。時期が終わったら、北上すればいいんですけどね」



ソネバキリの朝食では、野菜や果物を好みに合わせて調理してくれる

彼らの夢が広がった瞬間だった。

私も誇らしい気持ちになって、桜の美しさを語った。でも、次の質問で、言葉に詰まってしまったのだった。

「私たちはベジタリアンなんだが、日本に私たちの食べるものはあるかな」

すると彼の奥さんも、急に真剣な表情になって振り向いた。

「私たちは卵も食べないのよ」

ベジタリアンにも違いがあつて、彼らは、乳製品は食べるが卵は食べないのだ。

「このリゾートでは、私たちも十分に食事が楽しめる。満足しているよ」

私は、日本のお粗末な状況を考えて、さらに言葉が返せなくなってしまった。

宗教上の理由だけでなく、健康上、もしくは主義・主張によるベジタリアンは、いま世界的に非常に増えている。欧米人では、知識層や富裕層ほどベジタリアンが多い。だから、昨今、世界のラグジュアリーリゾートでは、ゲストの食べられないものは予約の段階で必ずチェックするし、通常のメニューの中にもベジタリアン向けメニューが普通に何種類も用意してある。

だが、日本のホテルや旅館でこうした対応

が整っているところは極めて少ない。ベジタリアンのインド人を北陸の旅館巡りで泣かせたとか、とんでもない話ばかり聞く。

どうも日本人には、特定のものが何らかの理由で食べられない状況への想像力が欠けているように思う。最近、ようやく食物アレルギーなどへの対応は進んできたが、ベジタリアンや宗教的な禁忌については、理解も対応もまだまだである。

日本にも精進料理の文化がある。そうしたものを利用して、ベジタリアンにも安心して楽しんでもらえる日本料理や、ベジタリアンに気配りのある旅館やリゾートがあつたなら、と思う。そろそろ旅するベジタリアンのニーズを本気で考える時代なのではないか。

彼らの経済力と人口を考えると、中国、韓国の次には、インド人観光客の波がやってくるに違いない。そのとき、鍵になるのは、言葉ではなく食事である。

それにしても、なぜタイにインド人が多かったのだろう。やけに手慣れていた国内線の対応を見ながら、日本の観光庁よりずっと目ざといタイの政府観光庁が国を牽げて仕掛けているのかもしれない、私は想像した。

(やまぐち ゆみ)

新着図書紹介



A5判 368ページ
定価 2,500円
東洋選書

東京の桐朋中学・高校の地理教諭を三十年以上にわたって務め、在職中から多くの本を執筆してきた著者・大沼一雄氏は、フリーとなった現在も、地図と旅の執筆活動に専念する、地図の専門家である。そのプロフェッショナルによると、最近「読図」という言葉が地図好きの人々の間でよく口にされるという。

「ここ数年は、NHKで放送された『プラタモリ』という番組が人気を集めてきたこともあり、古地図を持って街歩きをするのが趣味というタモリによる玄人はだしの造詣を通じて、「地図から読み解く町の変貌と、時空を超えて発見される歴史の断層面」の面白さも、広く知られるようになってはるはずだ。日本地理学会は二〇一〇年度に、「地理学的にも最も優れた番組」と評価して、NHKの制作チームに二〇一〇年度日本地理学会賞(団体貢献部門)を授与しており、その理由として「広い意味での地理教育の場としても非常に高く評価されよう」と説明、「会員に対して地理教育へ

のヒントを与えるものになるであろう」と指摘している。

「地図から読み解く町の変貌と、時空を超えて発見される歴史の断層面」を知ることの魅力を早くから訴えてきた著者は、「読図は、いわば旅の起爆剤なのだ」とも強調する。

地図の見方に慣れてくると、地形の特色だけでなく、そこに暮らす人々の日常生活までも自然と目の前に浮かんでくるようになるという。

「その地図に描かれている場所に自分も出かけてみたくなる」著者は、旅に出かける前に読図に専念することを勧め、「そうすればあなたの旅は二倍にも三倍にも増幅され、楽しいものになるはずだ」と記している。

『新々・日本列島地図の旅』(大沼一雄著、東洋選書)では、東北から沖縄まで全国二十九カ所について、国土地理院発行の二万五千分の一地形図の、明治から平成の時代に至るまでの何枚かの地図を時系列にたどることで、町の変貌と歴史の断層面を読み取っていく。

その中には、東京西部の市も含まれており、大正・昭和・平成の三時代にわたって掲載されている地図には、学生時代に口ずさんでいた松任谷由実の『中央フリーウェイ』に登場する東京中央競馬場やサントリーのビール工場なども含まれている。思わず、二万五千分の一地形図に見入ってしまった。

実は、筆者自身も、自分が生まれる前の昭和

二十年代と、自身の幼少期と思春期に当たる昭和三十年代・四十年代の航空写真や住宅地図などを見比べて、郷里の町並みの変遷をたどりながら自分史の再確認を行う作業を秘かに楽しんでいるため、著者の記述には一つひとつ深くうなずきながら、時空を超える旅を楽しんだ。

その過程で、三十八万平方キロという小さな日本国の表面」を四千三百四十二面に区切って製作された国土地理院の二万五千分の一地形図が、物理的・空間的な移動を伴う旅だけでなく、歴史的・時間的な旅への「起爆剤」でもあることを思い知らされた。

何十年という間隔を置いた地形図を何枚か並べて見比べることで、非常に深遠な、時空を超える旅が楽しめるのである。

本書で言及されている稲城市や多摩市、府中市、日野市などは、多摩川沿いに発展してきたエリアであり、地形図を時系列にたどることで浮かび上がってくる流域の変化は、鮮やかに地域の歴史を浮き彫りにして見せる。この地域への歴史的関心がにわかに高まり、多摩川を車窓から眺めて通勤する者として新たな視点も獲得させてもらうことができた。

著者が提唱する「観光地にとられず、地図とともに歩き、健康に満ち溢れた、費用のかからない」旅は、地域の外から訪れる旅行者だけでなく、地域を知る人々にとっても魅力的なものであるに違いない。

(挑全)

● 旅行者動向 2011 最新刊

最新の旅行の実態や旅行者の意識に関する全国アンケート調査結果を、当財団独自の切り口で分析、グラフや図表を多用して分かりやすく解説。
二〇一一年十一月発行



● 観光実践講座講義録 最新刊

「なぐつながる」が生む地域の新しい魅力

～高校生レストランのまち多気町に学ぶ～

毎年十一月に実施している二日間の講座講義録。二十三年度は初めて東京を離れて三重県多気町で開催。講師は多気町まちの宝創造特命監・岸川政之氏、三重県立相可高等学校食物調理科教諭・村林新吾氏、観光カリスマ、人間牧場主・年輪塾塾長、若松進氏、農業法人有限会社せいの里まめや代表取締役・北川静子氏、鳥取県境港市観光協会会長・榊田知身氏ほか。二〇一二年三月発行。



● 地域の「とがった」に学ぶ
インバウンド推進のツボ②

昨年発行の『地域の「とがった」に学ぶインバウンド推進のツボ』の続編。今回は主に資源の見つけ方や生かし方に関する「とがった」を中心に取り上げています。
二〇一二年五月発行。



● 訪れるに値する価値を自ら創る

～今求められる「ソフトデザイン」発想

当財団主催「第二十一回旅行動向シンポジウム」採録集。シンポジウムでは、「インスパーク長期滞在の旅」という三日間一カ所滞在型の旅行商品に成功させた(株)ワールド航空サービス・菊岡潤吾社長、日本にキャンオニツグという自然を生かした新しいアクティビティを導入した(株)キャンオニツグなどの事例から見えてくる時代の読み方、価値創造の知恵や発想の方法について、マーケティングコンサルタントの谷口正和氏に解説していただきました。重要なのは観光に関わる一人ひとりが人生という「時間」にもっとと敏感になり旅を通してすてきな時間の過ごし方や生き方を提示し、訪れるに値する価値を創り出す「ソフトデザイン」発想です。二〇一二年六月発行。



※当財団出版物の「注」文はホームページからお問い合わせください。
担当:公益財団法人日本交通公社 観光文化事業部

電話 03-5255-6076 http://www.jtb.or.jp

次号予告

● 観光地におけるまちづくりの本質は何か? 観光まちづくりの成果は観光客数だけでは測れません。観光まちづくり・その「心」を探る。次号特集は、観光まちづくりを実践し成果を上げている地域の事例を紹介し、地域が自ら考え、行動する自立した観光地へと構造を変えていく原動力の重要性について探ります。

研究調査だより

● ハワイでは、昨年二〇一二年における来島者数が前年比で三・八%の増加、来島者の総消費額は二五・六%の増加となりました。景気動向や為替相場などに左右される数字とはいえ、時期の低迷期から再び成長路線へと転換したハワイの観光からは改めて学ぶ点が多くあるように思います。

● 当財団では、例年一人から二人の研究員をハワイ大学が主催する二週間の夏季短期プログラム「Executive Development Institute for Tourism (EDIT)」に派遣しています。この研修は、観光人材育成を目的として行われるもので、主にアジア太平洋地域で観光に携わる行政官や民間事業者が参加しています。

● 研修では、マーケティングや商品開発、観光政策など多岐にわたるテーマについて、行政担当者や民間事業者など実際にハワイの観光の最前線に立つ講師陣から直接学ぶことができます。実際の観光地にまわった期間滞在の参加者にとっても大変貴重なものです。また、さまざまな国から参加者が集い議論を行うことは、改めて自国の観光を客観的に見直す機会にもなるのではないかと期待しています。

● そして今年の参加者は私。積極的に耳聞きし議論をして、今後の研究活動に生かせる成果を持ち帰りたいと思います。(中島)

【当財団からのお知らせ】

本誌は次号より、これまでの隔月での発行から一月、四月、七月、十月(発行日は原則十日)の年四回の季刊となり、特集を取り上げるテーマを当財団の活動や研究調査とリンクさせた企画にしていきたいです。当財団各部の活動や旅の図書館の情報なども掲載して、私とも公益財団法人としての事業活動へのご理解をより一層深めていただけるコンテンツづくりを目指します。

編集後記

◆ 小笠原諸島が昨年六月末にユネスコ世界自然遺産に登録されてから一年が経過した。当財団が小笠原における観光の調査研究活動を始めておまよ十五になる。これまでに研究員が何度か現地へ赴き、島民の皆さまや島外の関係者の皆さまと議論を重ねて、小笠原にふさわしい観光を共に考えてきた。

◆ ステークホルダーである行政研究者、事業者、住民そしてビジターの立場から小笠原の魅力を表していた。小笠原をこよなく愛する人々は、登録される前も後も、生活として研究の場である小笠原本来の自然をどう守れるかを考え、話し合い、実行に移して活動している。

◆ 観光から派生する経済的な活動は小笠原で生活する人々にとって大切な役割を果たしている。小笠原を愛している人々がそれぞれの立場から小笠原の魅力を伝えていく活動のものになることは何かをひもとくとき、これからの小笠原の観光がどうなればいいのかを表してくれた。残念ながら島への陸路の経験はないが、原稿を通して小笠原がどのように素晴らしいかを知ることができた。執筆者の皆さまの思いと展望を共有しながら、持続可能な観光の在り方をこれからも考えていきたい。(片桐)



観光文化 第214号

第36巻4号通巻第214号

発行日：2012年7月20日



発行所：公益財団法人 日本交通公社
東京都千代田区大手町2-6-1
朝日生命大手町ビル17F
〒100-0004 ☎03-5255-6071
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区大手町2-6-1
朝日生命大手町ビル17F 観光文化事業部内
〒100-0004 ☎03-5255-6090
<http://www.jtb.or.jp/publishing/>

編集人：片桐美徳

発行人：志賀典人



印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載